

ヴァスバンドゥの經典解釈法 (3)

——語義 (*padārtha*) ——

上 野 牧 生

はじめに

説一切有部の阿含經典を精確に解釈し、註釈するための指南書である『釈軌論』(*Vyākhyāyukti*)は、「目的」「要義」「語義」「次第」「論難・答釈」からなる五つの相(ākāra)に沿ってその全体が立論されている。この五つの相は、各々が經典解釈の手法であり、また註釈に際して註釈者が必ず説明しなければならない項目でもある。本稿はこのうち「語義」(*padārtha*, 玄奘訳「句義」)を取り上げる。この相は『釈軌論』において最も紙数が割かれ、ヴァスバンドゥが最も力を入れて論じたものである。「語義」定義箇所は、大別すれば、以下の四節に区分される(チベット語訳『釈軌論』各章における各節の配置を括弧内に示す)。

- (1) 一語の中に多義がある場合の語義解釈 (= 第一章中盤)
- (2) 多語の中に一義がある場合の語義解釈 (= 第一章末尾)
- (3) 上記(1)と(2)および下記(4)以外の語義解釈(全103例)の個別事例 (= 第二章全体)
- (4) **paryāya*, **lakṣaṇa*, **nirukti*, **prabheda* という四つの観点による語義解釈 (= 第三章冒頭)

以上の四節に対応して、本稿はその全体が四節からなる。具体的には、各節において「先行研究」「解釈例」「考察」「まとめ」の四項目を論ずる。本稿の目的は、『釈軌論』における語義解釈の「手法」に注目することにより、ヴァスバンドゥによる經典解釈にひかりを当てることである。これは、ヴァスバンドゥの經典観がその解釈手法と表裏一体であるとの推測に基づく。なお本稿の記

述は「語義」(1) (2) (4) の翻訳研究を含む拙稿 (上野 [2009] [2010] [2012a] [2013]) との重複が多いことを予めお断りしておく。

1 「語義」(1)

1.1 先行研究

「語義」(1) は、一つの語の中に複数の意味がある場合の語義解釈例、言い換えれば、複数の意味をもつ一単語を註釈する場合の模範例である。当該箇所では *vigata*, *rūpa*, *anta*, *agra*, *loka*, *āmiṣa*, *bhūta*, *pada*, *dharma*, *prahāṇa*, *nyāya*, *karmānta*, *skandha*, *saṃgraha* の 14 術語が取り上げられる。ヴァスバンドゥがかなりの基準に基づき 14 例を選択したのかはわからない。先行研究では、山口 [1959 : 171-174] が *vigata* の一部, *rūpa*, *anta*, *loka* の四例を訳出し、その解釈例文が阿含からの引用であることを指摘した (山口 [1959 : 177, n.6])。さらに李 [2001 : 185, n.85] が同じく *rūpa* を、小谷 [2000 : 41-42] が *dharma* を訳出した。宮下 [1983 : 10-12] は山口が端緒をつけた *vigata* の解説箇所をさらに詳細に分析した。そして『釈軌論』当該箇所の議論内容が『俱舍論』「智品」における他心智をめぐる議論を引き継いだものであることを例証し、『俱舍論』と『釈軌論』の連続性を指摘した。『釈軌論』当該箇所の註釈に際し、グナマティが実際に「智品」の該当箇所を引用しつつ註釈を進める点からも、宮下による指摘の妥当性は証明される。また NANCE [2012 : 138-146] に (1) 全体の英訳がある。*rūpa* から *pada* については上野 [2010] に、*dharma* から *saṃgraha* については上野 [2012a] に和訳があり、その双方のチベット語訳テキストが上野 [2013 : 26-36] にある。

SKILLING [2000 : 338, Appendix 3] およびそれに従う VERHAGEN [2005 : 582, n.82] ; NANCE [2012 : 138f.] は、「語義」(1) の解釈例として『釈軌論』で取り上げられるのは、*vigata* を除く 13 の術語であるとする。しかし、*vigata* に関する議論を開始するにあたり、ヴァスバンドゥ自身が「まず、一つ〔の語〕の中に多く〔の意味〕があるものとは、例えば『月子経』の中で」(VyY LEE 125(2))

14.1-2: re zig gcig la du ma 'byuñ ba ni dper na / ma zla ba'i bu mo'i bu'i mdo las /) と述べている。この点から *vigata* を解釈例に含み得ることは間違いない。したがって SKILLING, VERHAGEN, NANCE の理解は訂正を要する。

また上野 [2010][2012a] において回収したサンスクリットの平行例に基づき、14 術語の原語をほぼ確定し得た。それにより以下の訂正が可能である。

チベット語訳 '*dod chags dan bral ba* の原語をめぐり、山口 [1959 : 171-2] ; LEE [2001 : 14] は *vīta* を想定したが、回収し得たサンスクリットの平行例より、筆者は *vigata* を想定した。ただしこの両語は同義である。

agra のチベット語訳 *mchog* の原語推定をめぐり、VERHAGEN [2005 : 582, n.82] は *vara* を想定したが、SKILLING [2000 : 338, Appendix 3] ; LEE [2001 : 17] ; NANCE [2012 : 141] は *agra* を想定した。後者が正しい。

pada をめぐり、LEE [2001 : 20] ; VERHAGEN [2005 : 582, n.82] は *pāda* を想定したが、SKILLING [2000 : 338] ; NANCE [2012 : 143] は *pada* を想定した。後者が正しい。

nyāya のチベット語訳 *tsul* の原語推定をめぐり、LEE [2001 : 22] ; NANCE [2012 : 141; 251, n.38] は *naya* を想定したが、SKILLING [2000 : 338, Appendix 3] ; VERHAGEN [2005 : 582, n.82] は *nyāya* を想定した。後者が正しい。つまるところ、『釈軌論』において「語義」(1) として取り上げられているのは上記 14 術語である。

なお堀内 [2009 : xvi] 所載のシノプシスでは「語義」(1) に「一語に多義」(多義語)と「多語に一義」(同義語)との二つを含め、「語義」(2) を空欄にしている。しかし筆者は語義 (1) が「一語に多義」(多義語)に、語義 (2) が「多語に一義」(同義語)に相当すると考える。そのシノプシスは上野 [2013 : 2-3] に示した。

1.2 解釈例

「語義」(1) では、例題として取り上げられる各術語の同義異語群を韻文で挙示した後に、散文で個々の用例を示す形式が採られている。以下にその実例

として、*dharma* の試訳を挙げる（上野 [2012a : 1-2] の再掲のため、出典その他の注記をすべて省略する）。

[VyY][D śi 36a4-b2; P śi 40b2-41a2; LEE 21.5-22.3; UENO 31.16-32.15]

dharma は、①所知〔と〕、②道と、③涅槃と、④意〔根〕の対象〔と〕、⑤福德〔と〕、⑥現世と、⑦聖教と、⑧生〔と〕、⑨勸戒と、⑩慣習〔の意味〕で〔用いられる〕。

dharma という語は、

①「所知」(*jñeya)〔の意味〕では、「およそ有為であれ、無為であれ、諸法の中で最上のものは、離染であると語られる」(ye kecid dharmāḥ saṃskṛtā vāsaṃskṛtā vā virāgas teṣāṃ agra ākhyāyate) と説かれている如くである。

②「道」(*mārga)〔の意味〕では、「比丘たちよ、邪見は非法であり、正見は法である」と詳述されている如くである。

③「涅槃」(*nirvāṇa)〔の意味〕では、「法に帰依いたします」(*dharmaṃ śaraṇaṃ gacchāmi) と説かれている如くである。

④「意〔根〕の対象」(*manogocara)〔の意味〕では、「法処」(*dharmāyatana) と説かれている如くである。

そ〔の法〕は意〔根〕のみの対象である。ただ対象であるのみであって、所依(*āśraya)ではない。

⑤「福德」(*puṇya)〔の意味〕では、「〔国王は〕眷族である王妃や王子らと共に福德（法）を勤修〔する〕」と詳述されている如くである。

⑥「現世」(*iha/aiḥika)〔の意味〕では、「現法において経験すべき〔業〕」(dṛṣṭadharmavedanīyam) と説かれている如くである。

⑦「聖教」(*pravacana)〔の意味〕では、「この世で比丘が法を知る、すなわち契経や応頌や」(*iha bhikṣur dharmam jānāti tadyathā sutram geyam) と詳述されている如くである。

⑧「生」(*bhāvin)〔の意味〕では、「諸行の本質は、その〔ような〕特徴(*dharma)をもつ」と説かれたり、同じく、すなわち、「この身体は、

老いという特徴をもつもの(*jarādharmā)である」と説かれている如くである。

⑨「勸戒」(*niyama)〔の意味〕では、「比丘の四法」と説かれている如く、同じく「比丘たちよ、殺生は非法なり。殺生を離れることは法なり。」と説かれている如くである。

⑩「慣習」(*nīti)〔の意味〕では、「地域の法や一族の法」と説かれている如くである。

当該箇所では *dharma* の語義として 10 種が挙げられているが、『釈軌論』第五章ではさらに 2 種が挙げられている。その一方は当該箇所而言及されている *dharma* ⑦であるが、もう一方は当該箇所では挙げられてはいないものである(出典不詳)。第五章の記述は以下のとおり。

[VyY][D śi 120a7-b2; P si 140a3-5; LEE 269.16-270.6]

さらに、⑦「聖教」(*pravacana)も「法」と呼ばれる。例えば「どのようにして、比丘は、法を知るものであるのか。この世で比丘が法を知る、すなわち契経や応頌や」と広範に出ている如くである。

⑪「道理」(*yukti)も〔「法」と呼ばれる〕。例えば「法を以て法を求め、非法を以て〔法を求めるの〕ではない」と説かれている如くである。

これらを総合すれば、『釈軌論』全体では少なくとも 11 の語義が列挙されることになる。『プトウン仏教史』(*Bu ston chos 'byung*)では『釈軌論』当該箇所を下敷きとして「法」(chos)の語義が計 13 例ほど挙げられている。⁽²⁾ プトゥン・リンチェンドゥブは『釈軌論』第一章の 10 例(①から⑩)と第五章の 1 例(⑪)とを総合し、そこに⑫「所証法」(bsgrub bya'i chos)と⑬「否定されるべき法」(dgag bya'i chos)とを付加して説明している。プトウンは『釈軌論』第五章の記述をも正確に把握していたのである。

さて、当該箇所は『釈軌論』の中でも特に有名な箇所であり、先行研究も多い。その『プトウン仏教史』を英訳した OBERMILLER [1931: 18-19, n.142] は『釈軌論』の出典箇所を指摘した。小谷 [2002: 41-42] は『釈軌論』および

『プトゥン仏教史』の該当箇所を和訳した。櫻部〔2003：22-23〕は『釈軌論』の記述内容を分析し、②は有為無漏の、③は無為無漏の、④は十二処中の「法処」の一つ、⑤は有為有漏の「法」が該当し、①は一切の「法」が該当する、と指摘した。上野〔2012a：1-2, ns.3-13〕は本庄良文教授の指導のもと、釈軌例として挙げられた経文の出典および平行例を比定し、それらが有部阿含に基づくことを示した。堀内〔2013a〕は当該箇所全体を平易に解説した。

『釈軌論』全体では、「語義」(1)の他、四箇所にわたって同一の手法が使用されている。第一章の「目的」箇所にみられる *alam* (本庄〔2001：116-117〕；上野〔2012a：8-9〕に既出)、第三章「答釈」(1)にみられる術語としての *prayoga*、第二章 (§94, SKhŚ no.100)にみられる *su*、および第五章にみられる *aho* の語義解釈も、「語義」(1)の形式で説明されている。これらは *prayoga* を除けば、接頭辞 (*upasarga*) ないし不変化詞 (*nipāta*) の語義解釈に使用された例である。後二者の用例を以下に示す。

su の語義解釈

[VyY][⁽³⁾D śi 78a3-4; P si 92a1-3; LEE 146.6-15]

'di ni 'jig rten na bde bar gśegs pa dag ces bya'o zes bya ba'i bde bar zes bya ba
'di ni ma lus pa'i don la yañ mthoñ ste / dper na zas bde bar źu'o // bum pa legs
par gañ ba'o zes bya ba lta bu'o //

bsñags pa'i don la yañ mthoñ ste / dper na gzugs bzañ po cha lugs bzañ po zes
bya ba lta bu'o //

phyir mi ldog pa'i don la yañ mthoñ ste / dper na gcin nad las bde bar thar ro ⁽²⁾//

'byuñ po'i gdon las bde bar thar ro ⁽³⁾zes bya ba lta bu'o //

don nram pa 'di gsum gyis bde bar gśegs pa dag yin te /

1) gśegs VyY (DL) : gśigs VyY (P) 2) ro // VyY (DL) : te / VyY (P)

3) ro VyY (DL) : to VyY (P)

「以上の方が、世間において善逝 (*sugata*) たちと呼ばれる⁽⁴⁾」という

〔経文の〕中の *su* というこ〔の語〕は、①「残余なく」(**niḥśeṣam*) という意味も見られる。例えば「食材が完全に溶ける」「瓶が完全に満ちる」(**supūrṇaghaṭa*) という如く。

②「称讃」(**praśasta*) という意味も見られる。例えば「容姿もすばらしく」(**surūpa*)、服装もすばらしい」という如く。

③「不退」(**apunarāvṛtti*) という意味も見られる。例えば「熱病から快復した(再発しない)」(**sunaṣṭajvara*)、「憑物から快復した(憑物が落ちた)」(**sunaṣṭabhūtagraha*) という如く。

以上の三種の意味で、「善逝たち」なのである。

aho の語義解釈

[VyY][D śi 133b3-5; P si 155a4-6; LEE 309.9-20]

kye ma'o źes bya ba'i tśig gi phrad 'di ni ya mtsan gyi don la yañ mthoñ ste /
dper na bad sa'i bus mñon par dad nas kye ma'o sañs rgyas kye ma'o chos ni¹⁾
legs par gsuñs pa źes smras pa lta bu'o //

mya nan byed pa'i don la yañ sa'i bcud nub pa dañ kye ma'o sa'i bcud kye ma'o
sa'i bcud ces mya nan byas pa lta bu'o //

smon pa'i don la yañ ma la kye ma'o // bdag mi skal ba bzañ po²⁾ rñams dañ skal
ba mñam pa ñid du skye bar śog cig ces bya ba lta bu'o //³⁾

smad pa'i don la yañ dper na rkun po byed pa na kye ma bram ze'i legs pa yin
no źes bya ba lta bu ste / de ni 'dir mya nan byed pa'i don du blta bar bya'o //

1) sañs rgyas kye ma'o VyY (DL) : om. VyY (P)

2) po VyY (DL) : po pa VyY (P) 3) cig VyY (PL) : śig VyY (D)

aho というこの不変化詞は、①「驚嘆」の意味で〔用いられる例〕も見られる。例えば「ヴァツツァ〔姓 **vatsagotra*〕の息子は、浄らかな信を起こして、『おお (*aho*)、仏よ、おお、法は善く説かれた』と語った」⁽⁶⁾〔という〕如くである。

②「慨嘆（憂い）」の意味でも、「大地の精髓（エキス）が消失するや否や、『ああ（aho）⁽⁷⁾、大地の精髓が、ああ、大地の精髓が』と憂いた」〔という〕如くである。

③「懇願」の意味でも、「母よ、どうか（aho）、私を、諸々の幸福の分前をもち、均等な分前をもつ人間の状態に生んで下さい⁽⁸⁾」という如くである。

④「憤慨」の意味でも、例えば「盗人になるくらいなら、ふん（aho）、婆羅門の方がましだ⁽⁹⁾」という如くである。

以上、ここ〔の用例〕では慨嘆（憂い）の意味で〔用いられていると〕みなすべきである。

1.3 考察

「語義」(1) は、ある経句の註釈に際して、当該句の語義要素（同義異語）を一通り列挙した上で、その最も適切な語義を指摘する手法である。このように同義異語を列挙する仕方はヴァスバンドゥ自身が言及（→ 2.3.2）する *Nighaṇṭu* 等に先行例があり、また *Amarakośa* 等に踏襲されているが、当該二文献に同義異語として挙げられる用例の語彙が『釈軌論』と一致しないのは、ヴァスバンドゥが用例を収集した範囲が有部阿含・有部律に限定されているからである。用例を収集する範囲を限定しなければ、語源学（*nirukta*）や文法学（*vyākaraṇa*）などをも視野に含めれば、さらに多くの語義（同義異語）を提示することはおそらく可能であろう。しかしそうした選択はなされていない。あくまで、有部阿含・有部律（アヴァダーナを含む）に見出すことができる語義に限定して、用例が収集されたと推測される。言い換えれば、意図的に用例の収集範囲が有部阿含と有部律とに限定され、それらに含まれる語彙の中から 14 例の術語が選択されている。つまり、仏説の語義をなるべく仏説の内部から導出しようと試みている点に特徴がある⁽¹⁰⁾。

別の観点から見れば、*su* の解釈例において、*sugata-* という術語の語義要素に接頭辞 *su* の三つの意味（①②③）が含まれる様に、「語義」(1) は単一の経

句が保持する多義性を明示する手法でもある。ヴァスバンドゥは、ある文脈における単一の経句が多数の語義をもつことを否定しない。むしろ經典は経句・経文の多義性を前提とした構造を有するとみなされていたはずである。

なお「語義」(1)の最後部には「以上は例を述べたに過ぎない」(de lta bu ni dper brjod pa tsam du zad do)との但し書きがあるように、14術語のあらゆる語義が列挙されているわけではない。ここに列挙されたのはあくまでその一例であって、全ての語義ではない。

かかる手法は、類例を挙げるまでもなく、ヴァスバンドゥ自身による『縁起経釈』⁽¹¹⁾の他、ブツダゴーサら南方系の註釈文献、大乘經典を対象とした北方系の註釈文献に多用されている。あるいは近年の報告によれば、真谛⁽¹²⁾(Paramārtha, 499-569)による諸著作、およびそれらの諸著作を参照していた圓測(613-696)による註釈文献にもその適用が認められるという。

1.4 まとめ

「語義」(1)は、経句の註釈に際して、[1]当該語の用例を網羅的に収集した上でそれらを一括して示し、個々の文脈に即した語義を指摘する手法である。これは、語義の確定に際して現代の我々が用例を網羅的に収集・分類する手法と軌を一にする。別の観点から見れば、これは[2]単一の経句が保持する多義性を明示する手法でもある。ある文脈における単一の経句が多数の語義をもつ場合もこの方法が適用されている。そして、[3]用例の探索された範囲が有部阿含・有部律に限定されている。つまり仏説の語義はあくまで仏説の内部から導出されている。[4] *Nighaṇṭu* 等に先行例があることから、この手法はヴァスバンドゥによる創案ではない。方法論的にも至極単純なものであるから、当時、当地において一般的な、または正統な手法として第三相「語義」の冒頭に配置されたと推測される。

2 語義 (2)

2.1 先行研究

「語義」(2) は、複数の語の中に単一の意味がある場合の語義解釈例、言い換えれば、同一の意味をもつ複数の単語を註釈する場合の模範例である。先行研究では、山口 [1959 : 174-177] が (2) の大まかな構成を分析し、僅かに部分訳を示した。Prapod and SKILLING [1999] が最後部の内容分析を行い、校訂テキストと英訳とを公表した。また SKILLING [2000 : 320] と VERHAGEN [2005 : 582-583] とが概論を試みた。これらを承けて、(2) 全体を NANCE [2012 : 146-152] が英訳⁽¹³⁾し、同じく上野 [2013 : 4-22] が和訳した。Prapod and SKILLING [1999] が手がけた箇所をも含む「語義」(2) 全体のチベット語訳テキストが上野 [2013 : 37-45] にある。

2.2 解釈例

2.2.1 「語義」(2) の三類型

「語義」(2) はヴァスバン・ドゥ自身により三つの類型に分類される。

[VyY][D śi 37b6-7; P si 42b3-4; LEE 25.24-26.4; UENO 37.3-7]

tśig du ma la don gcig pa ni dper na nram grañs gyi tśig lta bu'o //

gžan yañ don nram pa gsum ste /

2.1 so so re re la brjod par bya ba'i don dañ /

2.2 bsdus pa'i don dañ /

2.3 dgos pa'i don no //

多語の中に一義〔がある〕とは、例えば異門の語の如くである。

さらに〔別の解釈では〕、三種類の意味がある。

2.1 個々に語られるべき〔語の〕意味 (**pratyeikaikavācyārtha*) と、⁽¹⁴⁾

2.2 包摂された〔語の〕意味 (**saṃgrhītārtha*) と、

2.3 目的の意味 (**prayojanārtha*) である。

このうち、まず、2.1 は次のように定義される。

[VyY][D śi 37b7-38a1; P si 42b4-5; LEE 26.5-8; UENO 37.9-11]

de la so so re re la brjod par bya ba'i don ni brjod pa gañ gis¹⁾ brjod par bya ba
yañ yin te / dper na ma rig pa'i rkyen gyis 'du byed rnams žes²⁾ bya ba la ma rig
pa gañ že na / 'du byed rnams gañ že na žes bya ba de lta bu la sogs pa bśad pa
gañ yin pa'o //

1) rjod pa gañ gi VyY (DL) : brjod pa gañ gi VyY (P). *Read* brjod pa gañ gis.

2) žes VyY (DL) : śes VyY (P)

3) 'du byed rnams gañ že na VyY (PL) : om. VyY (D)

そのうち、「個々に語られるべき〔語の〕意味」とは、語によって語ら
れるべきものでもある。例えば、「無明を縁として諸行が〔生ずる〕
(avidyāpratyayāḥ saṃskārāḥ) という中で、無明とは何か、諸行とは何か」
というようなことなどを解説するものである。

続いて 2.2 は次のように定義される。

[VyY][D śi 38a1-4; P si 42b5-43a1; LEE 26.9-26; UENO 37.13-38.2]

bsdus pa'i don ni don tha dad pa'i tśig rnams kyis don bsdus pa gañ yin pa ste /
Ⓐ ji ltar srid pa'i yan lag bcu gñis pa'i tśig rnams kyis mdor kun nas ñon moñs¹⁾
pa gsum po ñon moñs pa dañ / las dañ / skye ba'i kun nas ñon moñs pa rnams
bstan pa lta bu dañ / Ⓑ de bzin du ma dad pa ni dad pa phun sum tśogs pa la
yañ dag par len du 'jug pa nas / śes rab 'chal ba ni śes rab phun sum tśogs pa'i²⁾
bar tśig 'di rnams kyis ni mdor na 'jug pa dañ bcas pa'i mñon par mtho ba dañ
ñes par legs pa'i rgyu yañ dag par len du 'jug pa yoñs su bstan pa yin te / 'di ltar
dad pas tśul khrims la sogs pa la 'jug la / tśul khrims dañ gtoñ ba gñis kyis ni³⁾
lus dañ loñs spyod phun sum tśogs pas bsdus pa'i mñon par mtho ba 'thob bo //
śes rab kyis ni ñes par legs pa 'thob bo žes bya ba de lta bu la sogs pa'o //⁴⁾

1) kyis VyY (DL) : kyis VyY (P) 2) ba VyY (DP) : pa VyY (L)

3) la sogs pa la 'jug VyY (DL) : om. VyY (P)

4) bya ba VyY (DL) : om. VyY (P)

「包摂された〔語の〕意味」とは、意味内容が異なる諸語の要約された意味なるものである。④すなわち、有の十二支分に関する諸語によっては、要約すれば、三雑染〔すなわち〕煩惱(*kleśa)・業(*karman)・生(*janman)という諸雑染が説かれている如くである。⑤同様に「不信〔の父母二人〕が、信を円満にするよう、発奮させる」(āsrāddham [mātāpitarāṃ] śraddhāsāmpadī samādāpayati)⁽¹⁵⁾ —中略—「慧の悪しき者が[§]、慧を円満〔にするよう、発奮させる〕」(duṣprajñāṃ prajñāsāmpadī [samādāpayati])〔という経文〕まで、これらの諸語によっては、要約すれば、活動を伴った繁栄(*abhyudaya)と、〔活動を伴った〕至福(*niḥśreya)との要因を発奮させることが説かれている。なぜなら、「信によって戒などを実践し、戒(*śīla)と捨(*tyāga)の二つによっては、〔それぞれ〕身体(*kāya)と享受(*bhoga)との円満に含まれる繁栄が獲得される。慧(*prajñā)によっては、至福が獲得される」云々の如く〔だから〕である。

続いて 2.3 は次のように定義される。

[VyY][D śi 38a4-5; P śi 43a1-2; LEE 27.2-5; UENO 38.5-7]

dgos pa'i don ni nram graṅs gsuṅs pa nams kyi don brjod pa gaṅ yin pa ste / de dag la ni so so re re la brjod par bya ba'i don kyaṅ med la / bsdus pa'i don kyaṅ med de / brjod par bya ba gcig tu zad pa'i phyir daṅ /

「目的の意味」とは、〔世尊が[§]〕お説きになられた諸異門の意味を説明するものである。それら〔の諸異門〕には、(1) 個々に語られるべき〔語の〕意味もなく、(2) 包摂された〔語の〕意味もない。説明されるべき〔意味〕は一つに尽きるからであり、

ヴァスバンドゥに従えば、上記三類型の定義は次のようになる。

2.1 「個々に語られるべき〔語の〕意味」とは、語によって語られるべきものである。

2.2 「包摂された〔語の〕意味」とは、意味内容が異なる諸語の要約された意味なるものである。

2.3 「目的の意味」とは、〔世尊が〕お説きになられた諸異門の意味を説明するものである。

このうち 2.1 と 2.2 については簡潔な説明に留まる一方、2.3 は多くの紙数が費やされている。その紙数に比して、その重要性も最も高いと推測される。2.3 は経に説かれる「異門」(paryāya), すなわち同義異語に焦点を当てた解釈法であり、2.1 や 2.2 とは異なることが付言されている。既に山口 [1959 : 174-176] による簡潔な要約があり、山口は当該箇所を①「異門において説示されたものの意味が語られること」, ②「uddeśa (標拳) と nirdeśa (解釈)」, ③「数 (saṃkhyā) に関するもの」, ④「語の意味 = 力 (śakti)」の四項目に区分する。しかし山口による区分に反し、管見では、2.3 の議論内容はおそらく以下の二項に大別しうるはずである。

- 阿含に説かれる標拳と詳説が有する「目的の意味」
- 阿含に説かれる数的表現が有する「目的の意味」

以下、この二項を個別に論ずる。

2.2.2 解釈例(1) : 標拳と詳説

標拳と詳説の例証として『釈軌論』⁽¹⁶⁾では四例の経文が提出されるが(上野 [2013 : 6-9]), その典型ともいえる「縁起」を例証とする第三例は以下のとおり。

[VyY][D śi 38b1-2; P si 43a7-8; LEE 27.23-28; UENO 39.2-7]

de bzin du

rten cin 'brel bar 'byuñ ba gañ ze na / 'di lta ste / 'di yod pas 'di 'byuñ 'di
skyes pa'i phyir 'di skye

zes bya ba ni bstan pa'o //

'di lta ste / ma rig pa'i rkyen gyis 'du byed rnam

zes rgyas par 'byuñ ba ni bśad pa'o //

同様に、

縁起とはなにか。すなわち、「これがあるときかれが生ずる」「これ

か⁽¹⁷⁾が生起するからかれが生起する」

とは標挙 (*uddeśa) である。

すなわち、無明を縁として諸行が⁽¹⁸⁾〔生ずる〕

とは詳説 (*nirdeśa) である。

「これがあるときかれが生ずる」(asmin satīdaṃ bhavati), 「これが生起するからかれが生起する」(asyotpādād idam utpadyate) という縁起の定型句が標挙に, 「無明を縁として諸行が〔生ずる〕」という順観の構文が詳説に相当する。この点は、『釈軌論』に次ぐ『縁起経釈』(Pratītyasamutpādayākyā) にて註釈対象とされた『縁起経』が⁽¹⁹⁾, 縁起の定型句を「初分」(ādi) と, 順観の構文を「分別」(vibhaṅga) と呼び, さらに『縁起経釈』が「初分」を標挙, 「分別」を詳説と位置づける註釈内容と符号する。

[PSVy][Tucci 613.7-10 = Tucci 1971: 240.6-241.5]⁽²⁰⁾

ādir uddeśo nirdeśasya tatpūrvakatvāt. tena cādīyate yasmāt
pratītyasamutpādaḥ. **vibhaṅgo**¹⁾ nirdeśaḥ. nirdeśa uddeśavacanam. uddeśasya
sukhenārthagatyaartham. nirdeśasyālpena yatnena sukhāṃ²⁾ samdhārāṇārtham ca.
vṛttisūtrabhūtāt. evaṃ hi svākhyāto bhavati. samāsato vyāsataś cākhyānāt.

1) Tucci: vibhaṅge 2) Tucci [1971: 241]: mukhaṃ

初分は, 標挙である。詳説はそ〔の標挙〕を前提とするからである。なぜなら, そ〔の標挙〕によって縁起は把握される (ādīyate)。分別は, 詳説である。詳説とは, 標挙について語ることである。標挙は, 容易に〔法の〕意味内容を理解するためである。そして詳説は, わずかな努力によって容易に〔法の意味内容を〕遍く記憶するためである。〔例えば,〕注解とスートラの如きものだからである。実に以上のようにすれば, 「善く説かれたもの」(svākhyāta) となる。略説として, または広説として説かれるからである。

『縁起経釈』の解説によれば, 標挙は「容易に〔法の〕意味内容を理解するため」, そして詳説は「わずかな努力によって〔法の意味内容を〕遍く記憶する

ため」ということを目的とする（→2.3.2）。さらに両者の関係はストラと注解の関係に喩えられ、あるいは略説と広説とも呼ばれる（上野〔2012b：22-41〕）。そして、特に注目したいのは、標挙と詳説の完備が「善く説かれたもの」（svākhyāta）の必要条件とみなされている点である。svākhyāta- という語は、有部阿含においては三帰依の一部としての「法」を定義する経文の第一要素である。ヴァスバンドゥ自身が「語義」（3）でかかる「法」を定義する三つの経文を取り上げ、そこに含まれる svākhyāta- を註釈するに「そ〔の経文〕の中で、顛倒のない〔法〕を正しくお説きになられたから善く説かれたものである」（tatrāvīparīta[dharma]samākhyānāt svākhyātaḥ）などと述べ、それこそが外道法と仏法とを区別するメルクマールであると述べている。つまりこの『縁起経釈』における『「善く説かれたもの」となる」との一文は、標挙・詳説を完備した教説こそが仏説として相応しいと述べていることになる。ヴァスバンドゥはそれ程までに、経における標挙と詳説の完備を重要視しているわけである。

さて、続いて「有暇」を例証とする『釈軌論』の第四例を確認する。グナマティによる註釈（テキストは省略）と共に示す。

[VyY][D śi 38b2-3; P śi 43a8-b2; LEE 28.1-7; UENO 39.7-11]

de bzin du

tse dan ldan pa dag bcu gñis po 'di dag ni khom par gyur pa yin no
 zes 'byuñ ba 'di las bdag dan gzan phun sum tsogs pa zes 'byuñ ba ni bstan pa
 yin la / lhag ma ni bsad pa yin te / bstan pa dan bsad pa gñis kyi bcu gñis su
 'gyur te / de lta bu la sogs pa bstan pa'i tśig rnam kyī dgos pa'i don yañ brjod
 dgos so //

同様に、

具寿者たちよ、これら十二が有暇（*kṣaṇa）となるものである⁽²³⁾
 と説かれているこ〔の経文〕の中で、「自・他〔に関する要件の〕完備」（*ātmaparasampad）と説かれるのは標挙であり、残り〔の十〕は詳説である。標挙と詳説との二つによって十二となる。以上〔の経文〕をはじめとする「標挙」の諸語に関する「目的の意味」についても説明する

必要がある。

[VyYT][D si 153a7-b4; P i 17b5-18a2]

同様にと詳細に説かれているのは、「具寿者たちよ、これら十二が『有暇』となるものである」〔と〕。

「十二」とはなにか？①自己〔に関する要件の〕完備（*ātmasampad）と、②他者〔に関する要件の〕完備（*parasampad）と、③人間である〔こと〕（*manuṣyagati）、④内地に出生すること、⑤不完全な感覚器官のないこと（*indriyāvikalātā）、⑥業の転変なきこと（*aparivṛttakarmāntatā）、⑦勝処に対する淨信（*āyatanagataḥ prasādaḥ）、⑧諸仏が出現なさること（*tathāgatānām utpādaḥ）、⑨正法の説示（*saddharmadeśanā）、⑩説示された諸法〔の輪〕が引き続いて転ぜられること（*avasthitānām dharmāṇām avasthānam）、⑪他〔の衆生〕への憐れみ（*parataḥ pratyānukampā）である。

そのうち、有暇となるものとは、自己の目的をなす機会が近くにある状態である。

【問】標挙と詳説との二つによって十二となる〔とは〕、どのようにか？

【答】①自己〔に関する要件の〕完備が「標挙」である。そ〔の成立要件〕の詳細なる「詳説」が、③人間である〔こと〕、④内地に出生すること、⑤不完全な感覚器官のないこと、⑥業の転変なきこと、⑦勝処に対する淨信、というこれら五つの用語によって。

同じように、②他者〔に関する要件の〕完備が「標挙」である。そ〔の完備〕の詳細なる「詳説」が、⑧諸仏が出現なさることなどの五つの用語によって〔示されている〕のである。

『広義法門經』に説かれる、十二項目からなる有暇（dvādaśakṣaṇa）⁽²⁴⁾のうち、①と②が標挙に、③以下が詳説にあたる。グナマティの註釈に従えば、より正確には③から⑦は①の詳説に、⑧から⑫は②の詳説に相当する。当該經文の場合、③以下の詳説は標挙①②の下位分類に相当する。⁽²⁵⁾

第三例における縁起の定型句及び順観の各支分、あるいは第四例における①から⑥、および⑦から⑫までの各要件は、すべて「異門」(paryāya)ということばで表現されうるのであるが、本節の冒頭で引用した2.3「目的の意味」の端的な定義に従えば、かかる諸異門の説明されるべき意味は、一つに尽きることになる。したがって上記の各異門は、それぞれ「縁起」「有暇」に関する同一の事柄を複数の表現で表したものとみなしうる。⁽²⁶⁾そして、なによりも経自身にそうした表現形式が採用されていることになる。言い換えれば、経文自体にそうした工夫が施されていることになる。

2.2.3 解釈例(2)：数的表現

続いてヴァスバンドゥは、経典に頻出する数的表現についてもその「目的」を説明すべきだとする。

[VyY][D śi 38b3-4; P si 43b2-3; LEE 28.8-11]

ji skad du phuṇ po lña nams daṅ / naṅ gi skye mched drug nams žes bya ba de
lta bu la sogs pa graṅs gsuṅs pa lta bu dag kyaṅ de dag gi brjod par bya ba'i don
mi go ba ni ma yin na / ci'i phyir graṅs gsuṅs pa'i dgos pa'i don yaṅ brjod dgos
so //

1) na / VyY (D) : no // VyY (PL)

五蘊や六内処といった、そうしたもののなどの如き、数(*saṃkhyā)の説かれた〔諸法〕も、それらの説明されるべき意味が理解されないわけではないのであれば、なぜ、数が説かれているのか、という目的の意味も、説明されなければならない。

こののち、経典にみられる数的表現の「目的」が八例ほど示される(上野[2013: 13-18])。うち第一例と第二例とを以下に示す。

[VyY][D śi 39a2-3; P si 44a3; LEE 29.9-12; UENO 40.12-15]

graṅs gsuṅs pa ni /

kha cig ni bgraṅ bar bya ba nes par gzuṅ ba'i phyir te / dper na

phuñ po lña rnam dañ / nañ gi skye mched drug rnam
žes 'byuñ ba lta bu'o //

1) gzuñ VyY (DL) : bzuñ VyY (P)

〔世尊が〕数をお説きになったのは、
ある〔経文〕は、数えられるべき〔法数〕を限定するためである
(⁽²⁷⁾saṃkhyeyāvadhāraṇārtham)。例えば、
「五蘊」〔と〕また「六内処」
と説かれている如くである。

続いて第二例は以下のとおり。

[VyY][D śi 39a3-4; P si 44a3-5; LEE 29.12-17; UENO 40.17-23]
grañ smos pas mi brjed pa'i phyir kha cig ni bde blag tu gzuñ ba'i phyir te /
dper na
gañ la la'i sems ñe ba'i ñon moñs pa ñi śu rtsa gcig gis ñe bar ñon moñs pa
can yin na
žes 'byuñ ba dañ / bCur bskyed pa las kyañ /
chos gcig ni gces spras su byed pa yin te
žes bya ba nas
chos bcu'i
bar du 'byuñ ba lta bu'o //

1) tu VyY (DL) : du VyY (P) 2) gzuñ VyY (PL) : bzuñ VyY (D)

3) rtsa VyY (DL) : om. VyY (P) 4) spras VyY (D) : sbras VyY (PL)

5) sa VyY (DPL). *Read* chos.

数に言及することによって忘失しないので、ある〔経文〕は、容易に把握するためである (⁽²⁸⁾sukhāvabodhārtham)。

例えば、

とある〔有情〕の心が、二十一の随煩惱 (*upakleśa) によって汚染

されているのであれば、⁽²⁹⁾
 と説かれており、『十上〔経〕』(*Daśottara*)でも、
 一法は有益である (*eko dharmo bahukarah*)⁽³⁰⁾
 と〔説かれており〕、ないし、
 十法 (*daśa dharmāḥ*)⁽³¹⁾

に至るまで説かれている如くである。

第一例は「ある〔経文〕は、数えられるべき〔法数〕を限定するため」、第二例は「数に言及することによって忘失しないので、ある〔経文〕は、容易に把握するため」というように、当該箇所では経文における数的表現の「目的」が八例ほど示される。この八例については後述する(→ 2.3.3)。

それに引き続き、上引した経文のように、経文中に数詞が明示されていなくとも、数量的目的を有する経文があるとして、幾つかの例が挙げられる。その例示に先立ち、次の質問が立てられる。

[VyY][D śi 38b4-6; P śi 43b3-6; LEE 28.12-21; UENO 39.14-21]

de bzin du tśig gzan gañ dag gi brjod par bya ba'i don ni grags na / de'i don gyi
 nus pa ¹⁾ñid ma yin pas de dag gi ²⁾dgos pa'i don yañ brjod dgos te / dper na

mñan yod ga la ba der rgyu žin gśegs so

zes bya ba'i brjod par bya ba'i don ni 'jig rten na grags na / ci'i phyir sañs rgyas
 sam ñan thos ljoñs rgyu žin gśegs pa dañ / de bzin du ci'i phyir bcom ldan 'das
 zla ba phyed dañ gsum nañ du yañ dag par 'jog par mdzad pa dañ / ci'i phyir tśe
 dañ ldan pa gsus po che chen po tśe dañ ldan pa ś'a ri'i bu ga la ba der soñ ño
 zes bya ba de lta bu la sogs pa'i dgos pa yañ brjod dgos so že na /

1) ñid VyY (DL) : ñid ni VyY (P) 2) gi VyY (DL) : gis VyY (P)

3) ba VyY (DL) : bar VyY (P)

【問】同様に、他の語の、説明されるべき意味が、〔世間で〕認知されている場合、そ〔の語〕の意味に効力はないから、それらの〔語の〕目的の意味も、説明されなければならない。例えば、

シュラーヴァスティに向けて遊行に出立した (yena śrāvastī tena
⁽³²⁾
cārikāṃ prakrāntaḥ)

という〔経文〕の説明されるべき意味が、世間で認知されているのであれば、「なぜ、仏あるいは声聞は地方を遊行なさるのか」、同様に「なぜ、世尊は二ヶ月半〔の間〕、安居なさるのか」「なぜ、同志マハーコーシュティラは同志シャーリプトラが居るところに向けて出発したのか」といったことなどの目的も、説明されなければならないのではないかと

「説明されるべき意味が世間で認知されている場合には、その語の意味に効力はない」という記述の意味を筆者は未だ理解できていないのだが、こののち、質問の中にある「なぜ仏は地方を遊行なさるのか」「なぜ声聞は地方を遊行するのか」「なぜ世尊は二ヶ月半安居なさるのか」「なぜ同志マハーコーシュティラは同志シャーリプトラが居るところに向けて出発したのか」の四例における数量的目的が具体的に説明される（上野 [2013 : 18-22]）。そのうち、第一例を以下に示す。

[VyY][D śi 39b1-5; P śi 44b3-7; LEE 30.16-31.7; UENO 42.7-24]

saṅs rgyas mams rgyu zñ gśegs pa ni rgyu bdun dag gis rig par bya ste / ① yul
gžan na 'khod pa mams 'dul ba'i phyir dan / ② de na 'khod pa mams skom par
bya ba'i phyir dan / ③ ñan thos mams gcig na ha cañ yun riñ du gnas pa span
ba'i phyir dan / ④ ñid de la chags pa mi mña' bar yañ dag par bstan pa'i phyir
dan / ⑤ yul mams mchod rten du 'gyur ba'i phyir dan / ⑥ srog chags mañ po
mams de'i druñ du blta ba dan 'gro ba la sogs pas bsod nams bskyed pa'i phyir
dan / ⑦ yams kyi nad dan than pa la sogs pa'i skyon rab tu zi bar bya ba'i phyir
ro //

bsdus pa'i tśigs su bcad pa ni /

① yul gžan 'dul bar bya phyir dan //

② de na 'khod pa skom bya'i phyir dan //

③ ñan thos du ma gnas bya'i phyir dan //

④ chags pa mi mña' bstan phyir dan // (Saṃgrahaśloka 5)

⑤ yul rnams mchod rten³⁾ 'gyur phyir dañ⁴⁾ //

⑥ lus can rnams kyi bsod nams phyir //

⑦ yams nad la sogs⁵⁾ 'zi bya'i phyir //

sañs rgyas rgyu 'zin gśeṅs par mdzad // (Saṃgrahaśloka 6)

1) spañ ba'i VyY (D) : spañs pa'i VyY (P) : spañ pa'i VyY (L)

2) skom VyY (PL) : bsgom VyY (D) 3) mchod VyY (PL) : mchog VyY (D)

4) phyir dañ VyY (D) : bya'i phyir VyY (PL) 5) 'zi VyY (D) : 'zes VyY (PL)

諸仏が遊行なさるのは、七つの要因によってであると知るべきである。

①他の場所に居住する人々を教化するため。②そこに居住する人々に〔仏を〕渴仰させるため。③声聞たちが一箇所にながく留まりすぎることを防止するため。④〔仏〕ご自身がそ〔の特定の土地〕への愛着をおもちでないことを明示するため。⑤〔諸仏の訪れた〕諸々の場所が聖地となるため。⑥多数の生類に、か〔の仏〕を近くに拝し、近づくなどすることによって福德を蓄積させるため。⑦疫病や干ばつなどの災禍を鎮静させるためである。

総括偈がある。

①他の場所〔に在る所化たち〕を教化するため、②そこに住んでいる者たちに〔仏を〕渴仰させるため、③声聞〔たち〕を複数〔の場所〕に留まらせるため、④〔仏は特定の土地への〕愛着をおもちでないことを明示するため。⑤諸々の場所が聖地となるため、⑥人々の福德のため、⑦疫病などを鎮めるため、仏は遊行をされた。(総括偈第5・6偈⁽³³⁾)

これは数詞が明示されていない経文の中よりその「目的」を抽出した上で、それを計量的に示す手法である。上記の第一例のみならず、当該箇所に取り上げられる全四例とも解釈対象となった経文は明示されていないが、全四例ともヴァスバンドゥ自身の手になる総括偈ないし先行文献による総括偈が付されているため、解釈法の習得よりも解釈内容の学習に力点が置かれた点が伺われる。

当該箇所以下四例の例示をもって、「語義」(2)は終了する。

2.3 考察

2.3.1 「語義」(2)の三類型

既に確認したように、「語義」(2)はヴァスバンドゥ自身により三つの類型に分類される。

2.1 個々に語られるべき〔語の〕意味 (**pratyeikaikavācyārtha*)

2.2 包摂された〔語の〕意味 (**saṃgrhītārtha*)

2.3 目的の意味 (**prayojanārtha*)

2.1は端的に「語によって語られるべきもの」と定義される。具体的には、ヴァスバンドゥがその『縁起経釈』において註釈対象とする『縁起初分別所説〔経〕』(*Pratītyasamutpādādivibhaṅganirdeśa*)の一節を例に、十二支縁起の中の「無明支」や「行支」など、各支分の「定義」(*lakṣaṇa*)⁽³⁴⁾を個別的に解説することが(1)「個々に語られるべき〔語の〕意味」だと説明する。つまり**pratyeikaikavācyārtha*とは、個々に言及され、定義されるべき語の意味を指す。『釈軌論』における説明は以上で尽きており、グナマティもこの2.1については註釈を施していない。

2.2は端的に「意味内容が異なる諸語の要約された意味なるもの」と定義される。そして④⑤二つの事例が例示される。④の趣旨は、例えば経に十二有支が煩惱・業・生の三雑染として要約的に説かれている場合の解釈例が解説されている(山口[1959:174])。無明、愛、取の三支分を煩惱雑染に、諸行、有の二支分を業雑染に、識および残りの支分を生雑染に配当させる、最も一般的な分類法を用いている。つまり十二有支の各支分を包摂する「煩惱」「業」「生」の三術語の意味が、「包摂された〔語の〕意味」となる。

⑤は、既に「目的」(*prayojana*)定義箇所で行き上げられたのと同じの経文である。当該経文のうち、当該経文のうち、信・戒・捨・慧の四財は「繁栄」と「至福」との要因である。ヴァスバンドゥの解説に従えば、信は戒・捨・慧の要因となり、さらに戒・捨・慧はそれぞれ「身体の円満により包摂された繁

栄」「享受の円満により包摂された繁栄」「至福」⁽³⁵⁾の要因である。つまり信・戒・捨・慧の四財を包摂する「繁栄」「至福」の二術語の意味が「包摂された〔語の〕意味」となる。したがって **samgrhūtārtha* とは、当該語に下位分類される諸語を内包する、すなわち下位分類を包摂する語の意味を指す。

2.3. についての考察は以下の二節にて行う。

2.3.2 考察(1)：標拳と詳説

なぜ経に標拳と詳説が説かれているのか、その「目的」を説明するに先立ち、ヴァスバンドゥは「目的」定義箇所において、経に「異門」（同義異語、ほぼ同一の意味をもつ別の表現）が説かれている「目的」（八項目）を次のように説明していた。

[VyY][D śi 31b7-32a3; P si 35a7-b3; LEE 10.4-19]

1. nam graṇs gsuṇs pa ni 'dul ba tha dad pa'i phyir te /
2. de'i tse dan phyi ma'i tse kha cig la la las khoṇ du chud par bya ba'i phyir
dan /
3. de'i tse nam par g-yeṇs pa rnam la brjod pa de ṇid kyis ni gzan dag gis
smad par 'gyur bas rnam graṇs kyis de'i don bstan par bya ba'i phyir dan /
4. yid mi gzuṇs pa rnam la yaṇ dan yaṇ du de'i don yaṇ dag par mtson pas
mi brjed par bya ba'i phyir dan /
5. tśig gcig la don du ma byuṇ bas don gzan du rtog pa bsal ba'i phyir dan /
6. gzan du miṇ de rnam kyis de'i don yaṇ dag par bsgrub pa'i phyir sGra ṇes
par sbyor ba lta bu dan / chos sgrogs pa rnam don gyi bśad sbyar dan go
bar byed pa gñis la thabs mkhas pa ṇid du bsgrub pa'i phyir dan /
7. ṇid la chos so sor yaṇ dag par rig pa mña' bar bstan pa'i phyir dan /
8. gzan dag la de'i sa bon bskyed pa'i phyir te /

1) la la VyY (DL) : la VyY (P) 2) kyis VyY (PL) : kyi VyY (D)

3) gis VyY (DL) : gi VyY (P) 4) bas VyY (DP) : pas VyY (L)

5) ṇid VyY (DP) : ṇiṇ VyY (L) 6) so sor VyY (DL) : so so VyY (P)

1. 〔世尊が〕異門をお説きになるのは、所化(*vineya)が多様であるためである。
2. その時点で、または後の時点で、ある人々をして理解させるためと⁽³⁶⁾、
3. その時点で、〔心が〕散乱している人々に、その同じ表現〔を繰り返すこと〕によっては、他の〔、〕〔心が散乱していない〕人々が、
「〔どうして無駄に同じ表現を繰り返すのだ〕と世尊を」非難するであろうから、異門（ほぼ同一の意味をもつ別の表現）でもって、その〔同じ〕意味内容を示すためと⁽³⁷⁾、
4. 注意散漫な人々に、繰り返しその〔同じ〕意味を開陳することで、忘れさせないためと、
5. 一つの語にたくさんの意味があるから、異なった意味で理解してしまうのを防ぐためと、
6. 『ニガントウ』(*Nighaṇṭu*)のように、別の〔経〕にて、それらの諸名詞でもって、そ〔の当該のことば〕の意味を正しく理解させるためと、説法者(*dharma-kathika/-bhāṇaka)らが、意味を説明することと理解させることの二つについての巧みな手立て(*upāyakaśālya)を完成させるためと、
7. 〔世尊〕ご自身に法無礙解がそなわっていることを示すためと、
8. 他の人々にその種子を植え付けるためである。⁽³⁸⁾

以上の流れを引き継ぐ形で、「語義」(2) 定義箇所では、経に標拳と詳説が説かれた「目的」が次のように説明される（なお当該箇所は『現觀莊嚴光明論』から梵文が回収可能であるため、『釈軌論』チベット語訳テキストを省略する）。

[VyY][D śi 38b7-39a1; P śi 43b7-44a1; LEE 28.23-29.3; UENO 39.23-40.5]

9. 「標拳」の語(uddeśavacana)が経によって注解された意味内容を記憶させると同様に、要約によって、その広く説かれた意味内容を記憶させるため(samāsenā vistārthādhāraṇārtham sūtreṇa vṛttiyarthādhāraṇavat)⁽³⁹⁾、
10. 略解による知者である所化たちを裨益するため(udghaṭitajñānām

vineyānām anugrahārtham),

11. そ〔の略解による知者〕とは別の〔所化の〕者たち（広説による知者 *vipañcitajña と言葉〔の暗記〕を最上とする者 *padaparama と）に、〔または〕後世の者たちに、略解による知者性の因を蓄積させるため (anyeśām āyatyām udghaṭitajñatāhetūpacayārtham),
12. 略説〔の〕, また広説の解説に対して能力を有する者たちに正しく示すため ([ātmanah] samāsavyāsanirdeśavaśiṭāsamdarśanārtham),
13. 〔それ〕以外の者たちに、以上を反復して行うことを通して、その〔略・広の解説を説示する〕種子を植え付けるためである (anyeśāmatathābhyāseṇa tadbhījāvaropañārtham)。

以上の内容を簡潔に要約すれば、「目的の意味」としての標挙と詳説は、表現の形式が異なるものの、全体としては同一の内容をもつ。ただし異門を列挙する経文において、第二番目（あるいは第二要素）以下に位置する異門は、第一番目（あるいは第一要素）の内容を細分化したものであり、詳説は標挙のより具体的な内容を指示する異門である。それらが経に説かれた「目的」は、所化の多様性という点に重点が置かれている。所化は各自がなしうる範囲内において、経文を受持し、その意味内容を理解すべきとされる。

なお『釈軌論』当該箇所のうち、1. から 8. は「世尊が異門をお説きになった目的」を述べる代表例として、アスヴァバーヴァ (*Asvabhāva) による『大乘莊嚴經論逐一解釈』(Mahāyānasūtrālaṃkāraṭīkā)⁽⁴⁰⁾ に言及され、9. から 13. はハリバドラ (Haribhadra) の『現觀莊嚴光明論』(Abhisamayālaṃkāralokā) に引用されていることから、後代の仏教僧に広く参照されていたことがわかる。

2.3.3 考察(2)：数的表現

経に説かれる様々な数的表現も、説明されるべき意味をその内に含む。したがって註釈者は「なぜ数が説かれているのか」を解説する必要がある。そこでヴァスバンドゥは、世尊が数的表現を説いた「目的」を、阿含の引用例を伴いつつ、八例に亘って説明する。紙数の都合上、原文を引用することは叶わない

ため、『釈軌論』に挙げられる「なぜ数が説かれているのか」についての「目的」を、以下に一覧にして示す（個々の該当箇所については上野〔2013：13-18〕を参照）。以下のうち1, 2, 3, 6は『現観莊嚴光明論』より原文の一部を回収した。⁽⁴¹⁾

2.3.2.1 ある〔経文〕は、数えられるべき〔法数〕を限定するため
(saṃkhyeyāvdhāraṇārtham)

2.3.2.2 数に言及することによって忘失しないので (avismaraṇāt), ある〔経文〕は、容易に把握するため (sukhāvabodhārtham)

2.3.2.3 ある〔経文〕は、詳細に解説されなければならない〔経〕を聞こうとはせず, 〔また〕多くを聞き, 保持することに怖れをなすところの者たちに, 注意して聴聞させるため (bahuśravaṇagrahaṇabhīruṇām śrotrāvdhānārtham)

2.3.2.4 ある〔経文〕は、為すべきことの多さに怖れ抱く者たちに, 氣力 (*utsāha) を生じさせるため

2.3.2.5 ある〔経文〕は、一つ〔の語〕によって一つの要約を説くため

2.3.2.6 ある〔経文〕は、分量を知らしめるため (parimāṇajñāpanārtham)

2.3.2.7 ある〔経文〕は、〔二つのものが〕ひとつであることを知らしめるためである。二つの法に関する作用 (*kṛtya), 食 (*āhāra), 対立物 (*vipakṣa) が共通するから。

2.3.2.8 ある〔経文〕は、〔仏世尊〕ご自身が、予め、無碍解となっているものの意味内容をお説きになる方であることを正しく示すため

以上の点から、経に説かれる様々な数的表現が、個々に多様な「目的」をもつものとして捉えられていたことがわかる。経文中の数的表現が単なる法数とはみなされておらず、各経文の文脈に即した個々の「目的」が正確に読み取られている。ただし、経に説かれる数的表現の「目的」が上記八類型にのみ限られるということではなく、おそらくは代表的なものが取り上げられたと推測される。

なお、標挙と詳説が有する「目的」と、数的表現が有する「目的」は一部において共通する（「容易に把握（理解）するため」「忘却しないようにするた

め」)。聴聞者が仏説を耳にしたとしてもそれを「理解しない」「忘却してしまう」という二つの過失を防ぐための工夫に重点が置かれている。一方で、前者は經典自体が備えている表現形式であるのに対し、後者は經文に含まれる数的表現（「五蘊」「六内処」）の目的を說法者自身が趣意（*abhiprāya*）する必要がある。後者は個々の文脈から個別の意図を読み取る必要がある。

2.4 まとめ

特に注目すべきは、ヴァスバンドゥにとって、「經」とは「標拳と詳説」という表現形式と、個々に明確な目的を有する「数的表現」という二つの要件を完備したもの、と捉えられていた点である。

この二つの要件は、『俱舍論』におけるヴァスバンドゥの經典觀とも関係する。室寺義仁は『俱舍論』における‘utsūtra’（「經典からの逸脱」）を五例ほど取り上げ、ヴァスバンドゥが「經からの逸脱」を根拠として他説を拒斥するために、その典拠たる「經」がそなえるべき必須要件となるものを抽出した。室寺によれば、それらに共通して認められる必須要件は、「ブッダによって説示された意味領域を限定する語句を必ず伴っていること」、具体的には、“yat kimcit tat sarvam”（漢訳の「彼一切」）という表現を伴って、説示対象の一切合切を説く經。または、‘eva’などの限定詞を伴って、あるいは限定詞がない場合でも‘dvayam’などの確定表現を伴って、説示内容をはっきりと限定して説く經。または、縁起の各支分について、それぞれの語義要素を残らず列挙するという仕方で限定的に説く經である、という（室寺 [2006: 157]）。『俱舍論』におけるこれらの議論が『釈軌論』における「語義」と共通する点は興味深い。

さらに、ヴァスバンドゥのこうした態度は、『順正理論』における「上座」が、標拳と詳説とを備えた經を「了義經」と価値付ける態度と共通する。分位縁起説のみを正統説と認め、標拳と詳説とをそなえてはいても『縁起經』を了義とみとめない（不了義とする）サンガバドラに対し、『俱舍論』の「經部師」および『順正理論』の「上座」は『縁起經』を了義とする。⁽⁴³⁾

3 語義 (3)

3.1 先行研究

3.1.1 『百経片』の存在

「語義」(3)には『釈軌論』第二章の全体が充てられている。第二章の内容は、全103例の経文に対する語義解釈である。解釈例となる103例の出典はやはり有部阿含・有部律であり、中でも特に有名な箇所が解釈例として取り上げられている。それらの経文は「語義」(1), (2), (4)の語義解釈法によっては整合的に解釈しえない特殊な用例である。そしてそれらの用例がひとつずつ解釈の俎上に載せられてゆく。ゆえに第二章の解読は個々の経文・経句に対するヴァスバンドゥの解釈(理解)を知りうる点でも重要である。一方で分量的にも、第二章は『釈軌論』の中で最大の分量を誇る。註釈者グナマティも、第二章に限っては全用例に註釈を施している。以上の点から、第二章は『釈軌論』最大の眼目とみなしうる。

さらに第二章に関しては、『釈軌論』の姉妹文献である『釈軌論の百経片』(*Vyākhyāyuktisūtrakhaṇḍasāta*, 以下『百経片』)との関連が見逃せない。『百経片』は、『釈軌論』に引用された経文と同一箇所の引用経文を羅列した引用集である。ヴァスバンドゥ自身が『釈軌論』の中で引用する経文を「経片」(*sūtrakhaṇḍa*)と呼んでおり、本書はその経片を109例集めた引用集であるため *sūtrakhaṇḍasāta* と命名されたと推測される。全109例の引用経文のうち、最初の1例は『釈軌論』第一章冒頭に、残りの108例は第二章に引用される経文である。なお第二章(103例)と『百経片』(108例)とで引用数が異なるのは、第二章にて引用されつつ解釈対象とされていない経文も、『百経片』に含まれている(引用されている)からである。『百経片』所引経文の引用範囲は、多くの用例では『釈軌論註』と一致するものの、しかし相違する例もまた少なくない。さらに『百経片』『釈軌論』『釈軌論註』に引用される経文間には異読も少なくない。したがって『百経片』は、『釈軌論』あるいは『釈軌論註』から所引阿含のみを抽出して作成された文献ではない。『百経片』はいづれかの阿含

に基づいている。かかる点から、『百経片』は『釈軌論』（特に第二章）学習用の阿含引用集であったと推測される。なお、その編者については北京版（P si 31b8）およびナルタン版（N si 29a1）のコロフォンに dByig gñen の名が記されているも、真偽は定かでない。

3.1.2 語義 (3) = 『釈軌論』第二章の構成

山口 [1959 : 177] によれば、全 103 例のうち、§1 より §8 まだが三宝、すなわち §1 から §4 が佛 (buddha)、§5 から §7 が法 (dharma)、§8 が僧 (saṃgha) を主題とする。さらに §9 から §32 まだが雑染分 (saṃkleśapakṣa) に相当し (§33-§35 には言及しない)、§36 から §66 が清浄分 (vyavadānapakṣa) に相当するということ。§67 以下については言及されていない。

これを筆者なりに補足・訂正すれば、§9 から §31 まだが雑染分、§32 から §61 まだが清浄分である。⁽⁴⁴⁾ §62 から §67 まだが説法・聞法を主題とする。§68 から §70 まだが「比丘たちよ、…しなさい／してはならない」という命令文を主題とする。§71 は身語意の三悪業を主題とし、続く §72 と §73 は口悪業を主題とする。§74 から §83 までは聖者（の業）に関する経文が続き、§84 から §98 は凡夫（の業）に関する経文が続く。§99 以下はどのように分類すべきか見当がつかないが、§99 は「仏・世尊が往時になされた布施・持戒・生天の話」（『中阿含経』第 133 経ほか多数）、§100 は「聖者である声聞は色を厭離し離染し解脱する」（『雑阿含経』第 11 経）、§101 はそれとは正反対に「凡夫は我を取り込む」（『雑阿含経』第 289 経）、§102 はそこから離れることを説く「炭火の例え」（aṅgārakarṣūpama, 『雑阿含経』第 1173 経）、§103 は「十二部教」（『中阿含経』第 1 経）をそれぞれ主題とする。

厳密にはではないが、暫定的には、おおよそ以上の如くに分類しうるのではないかと考える。

3.1.3 『釈軌論』第二章の先行研究

この第二章の全体に焦点を当てた研究は、現在のところ皆無である。個別に

は、山口 [1959 : 178-180] が佛の称讃（いわゆる佛の十號）を主題とする§1 を逐語的にではなく概略的に訳出した。松田 [1984b : 13, n.17] は同じ§1 における註釈内容（三宝の称賛方法）が『縁起経釈』の記述と共通することを指摘した（PSVy P chi 66b2-67a6, 松田 [1984b : 2-3]）。中御門 [2008 : 126-130] は同じ§1 に対するグナマティの註釈箇所全体を訳出した（『釈軌論註』のみの訳出）。

本庄 [1989 : 173] は『決定義経註』（*Arthavinīścayanibandhana*）に引用された『釈軌論』該当箇所の一覧を掲載し、§1, §5, §8, §25, §45, §57 が『決定義経註』に引用されていることを指摘した。

このうち§1 に関連して、『決定義経註』梵本校訂者の N. H. SAMTANI は校訂本の脚注にて『決定義経註』と『現観莊嚴光明論』との平行箇所を逐一指摘した（SAMTANI [1971 : 242, n.9f.]）。鈴木 [2009] は SAMTANI の指摘を見逃しつつも、『釈軌論』と『現観莊嚴光明論』との平行関係を取り上げた。以上の点から、§1 はともに梵文写本が残る『決定義経註』と『現観莊嚴光明論』から梵文を回収しうる。

石川 [1993 : 9-13] は§1 における佛の異名の各定義が『二卷本訳語釈』（*Sgra sbyor bam po gñis pa*）に取材された点を細かく指摘した。

中御門 [2010 : 84-7] は伝アサンガ作『法随念註』⁽⁴⁵⁾ 訳注の傍ら、法の称讃を主題とする§5-§7 を訳出した。

堀内 [2004] は三三昧を主題とする§53 を取り上げ、『俱舍論』「定品」の記述と合わせて詳細に考察した。

野澤 [1954 : 19-20] は『思釈炎論』（*Tarkajvālā*）第三章の訳註の傍ら、二諦に言及する§57 の第二解釈のみ（野澤の算出では§61）を訳出し、解説を加えた。

上野 [2012 : 11-15] は無常想を主題とする§61 の経文（SKhS no.66, 『雑阿含経』第 270 経に相当）のみを訳出し、チベット語訳テキストと『雑阿含経』第 270 経の対照資料を提示した。

堀内 [2013] は説法の二十行相を主題とする§62 と、聞法の十六行相を主題とする§63（ともに『広義法門経』*Arthavistara* が出典）との和訳およびチベット語訳テキストを提示した。

堀内 [2009 : 328-9, n.195] は色の厭離・離染・解脱を主題とする§100の一部を訳出し、チベット語訳『釈軌論』の暫定版である Lee [2001] の分節の誤りを指摘した。⁽⁴⁶⁾

李 [2001 : 68-73] は、十二分教を主題とする最終の§103を全訳した。堀内 [2006] [2009 : 33f.] は、同箇所をめぐって、十二分教の中の *sūtra*, *avadāna*, *vaipulya*, *upadeśa* を、『順正理論』や『入大乘論』と比較した上で考察した。続く堀内 [2007] は、同じく十二分教の *nidāna* と *udāna* を、主に『声聞地』の定義に主眼を置きつつ、諸他の唯識系論書の中の一資料として『釈軌論』を用いて考察した。

以上の個別研究の他にも、上野 [2012a : 39f., Appendix B] は *Samyuktāgama* からの 56 例の引用例を比定した。⁽⁴⁷⁾

SKILLING [2000 : 337, Appendix 1] は、§1 から §9 に至る経文の平行資料を僅かに示した。また SKILLING [2000 : 339f., Appendix 5.1] は第二章に引用される経片のうち幾つかの出典を示している。

なお、堀内俊郎が第二章の訳註研究を間もなく公刊する予定であると聞き及ぶ。

3.2 解釈例

以下に取り上げるのは、*Dīrghāgama* を解釈例とする §39 である。『百経片』では SKhŚ no.44 に相当する経文の語義解釈である。チベット語訳テキスト（イタリック体は経文であることを示す）とその和訳を以下に示す。

[VyY][D śi 54b4-55a3; P si 63a7-b8;
LEE 76.11-77.16]

dad pa skyes nas 'gro bar byed //

¹⁾ *soṅ nas chos ṅan par byed do //* ⁽⁴⁸⁾

ṣes bya ba ni mdo sde'i dum bu'o // ⁽⁴⁹⁾

『釈軌論』第二章 (§39) 和訳

信が生じて、〔尊者に〕近づく。

近づいて、①法を聴く。〔かの者は、その法を聞いて、②思惟する。思惟して、③考量する。〕

1) nas VyY (L) VyYT (DP) SKhŚ (DP) : na VyY (DP)

§39.1 de la *ñan par byed do* zes bya ba
ni tśig 'bru dañ don gyis so²⁾ //

sems par byed pa ni ji ltar thos pa'i
don ñes par sems pa'i phyir ro //

'jal bar byed pa ni rigs pas te³⁾ / legs⁴⁾
par gsuñs pa ñid kyi khyad par dmigs⁵⁾
kyis 'byed pa'i phyir ro //

ñe bar rtog par byed pa ni bsgom⁶⁾
pa'i rnam pas te / ji ltar gzun ba'i don so
sor rtog pa'i phyir ro //

bden pa de yañ lus kyis mñon sum du⁷⁾
byed pa ni gnas gyur pa'i tśe yañ dag pa
ji lta ba bzin du mñon par rtogs pa'i
phyir ro //

śes rab kyis so sor 'bigs par byed pa
ni bdag gis mñon sum du byas so zes⁸⁾
'jig rten las 'das pa'i ye śes kyi rjes las
thob pa 'jig rten pa'i ye śes kyis ñes par

考量して、④考察する。⑤そして、その真実に付き従うことによって現前にして、⑥智慧によって通達する⁽⁵⁰⁾。] (SKhŚ no.44)

というのが経片である。

【第一解釈】そ〔の経片〕の中で、
「①聴く⁽⁵¹⁾」(*śṛṇoti)とは、形式(*vy-añjana)と内容(*artha)とによって。

「②思惟する」(*cintayati)とは、聞いたとおりの内容を確実に思惟するからである。

「③考量する」(*tulayati)とは、理⁽⁵²⁾によって。善説性の殊勝性⁽⁵³⁾を特定するからである。

「④考察する」(*upaparīkṣate)とは、修習の種類によって。記憶したとおりの意味内容を個別に考察するからである。

「⑤そして、その真実に付き従うことによって、現前にする」とは、転依の際に如実に証得するからである。

「⑥智慧によって通達する」(*prajñayā supratividhyati)は、「わた

2) so VyY (DL) : om. VyY (P)

3) rigs VyY (DL) : rig VyY (P)

4) pas te VyYṬ (DP) : pa ste VyY (DPL)

5) kyi VyYṬ (D) : kyis VyYṬ (P) VyY (DPL)

6) pas te VyYṬ (D) : pas ste VyYṬ (P) : pa ste VyY (DPL)

7) du VyY (PL) : du 'du VyY (D)

8) gis VyY (DL) : gi VyY (P)

'dzin pa'i phyir ro //

§39.2 gžan yañ ñan pas ni thos pa las
byuñ ba'i ye šes ston par byed do //

⁹⁾
sems pas ni bsams pa las byuñ ba'o //

'jal ba dañ ñe bar rtog pa gñis kyis
ni mthon ba dañ bsgom pa'i lam gyi¹⁰⁾
bsgoms pa las byuñ ba ste / mthon ba'i¹¹⁾
lam gyis ni de bžin ñid so sor rtog pa'i¹²⁾
phyir sgro 'dogs pa med pa dañ skur pa¹³⁾
'debs pa med pa ñid kyis mñam pa la¹⁴⁾
'jog par byed pa'i phyir 'jal bar byed pa
yin no //

¹⁵⁾
bsgom pa'i lam gyis ni ji ltar 'jal ba
la yañ dañ yañ du rtog par byed pa'i
phyir ñe bar rtog par byed pa yin no //

bden pa de yañ zes bya ba ni gañ gi
dbañ du mdzad nas chos bstan pa'i mya
ñan las 'das pa yin no //

lus kyis mñon sum du byed ciñ zes
bya ba ni gnas gyur pa ñid kyis te /
rnam par grol ba thob pa'i phyir ro //

しは現証した」と、出世間知の中の後得世間知によって断定するからである。

【第二解釈】さらに〔別の解釈では〕、「①聴」〔という経句〕によって、聞所成慧を説く。

「②思惟」〔という経句〕によって、思所成〔慧〕を〔説く〕。

「③考量」と「④考察」〔という〕二つ〔の経句〕によって、見〔道〕と修道との修所成〔慧〕を〔説く〕。見道によっては、真如が個別考察されるから、無増益〔性〕と無損減性によって〔心が〕三昧に入るから、「③考量する」である。

修道によっては、考量したとおりに何度も考察するから、「④考察する」である。

「⑤そして、その真実に」とは、それを主題として法を説くのであるが、「真実」とは涅槃である。

「付き従うことによって現前にして」とは、転依性によって。解脱を

9) bsams VyY (DL) : bsam VyY (P)

10) bsgom VyY (DL) : sgom VyY (P)

11) gyi VyY (DL) : gyis VyY (P)

12) rtog VyY (DL) : rtogs VyY (P)

13) med pa VyY (DL) : om. VyY (P)

14) ñid VyYT (DP) : gñis VyY (DPL)

15) bsgom VyY (DL) : sgom VyY (P)

śes rab kyis so sor 'bigs par byed do
zes bya ba ni nram par grol ba'i ye śes
kyis so //

de ltar na dad pa la brten nas tśogs
dañ bcas pa'i lam dañ / lam gyi 'bras bu
nram par grol ba dañ / nram par grol
ba'i ye śes kun tu ston par byed do //

獲得するからである。

「⑥智慧によって通達する」とは、
解脱知によって。

以上のとおりであれば、信に依拠
して、資糧道と、道果である解脱と、
解脱知とが完全に説かれているので
ある。

さて、まずは解釈対象となっている経片に注目する。解釈対象は
Dīrghāgama (DĀ) no.19, *Kāmaṭhikasūtra* (別名 *Caṅgīsūtra*) である。パーリニ
カーヤでは『中部』(MN) 第 95 経 (*Caṅkīsutta*) に相当するが^s, 新出『長阿含』
梵文写本 (8 世紀前半) では「双品」(*yuga-nipāta*) に含まれているため、有部阿
含では『長阿含』に属することが判明した⁽⁵⁴⁾。さらに Schøyen Collection におけ
る仏教写本 (BMSC) にも当該經典に平行する梵文断片が含まれる⁽⁵⁵⁾。ヴァスバ
ンドゥが承けた經典伝承の系統を知るため、以下に DĀ ms; BMSC; MN no.95
の用例を列举する：

DĀ ms 375.5-7: sa śraddhājāta upasaṃkrāmati upasaṃkramya dharmaṃ śṛṇoti śrutam
dharman dhārayati dhṛtam dharmaṃ cintayati cintayitvā tulayati tulayitvā upaparīkṣate
upaparīkṣayan satyaṃ ta⁽⁵⁶⁾(da)nvāyena sāksātkārīti prajñāya ca supratividhyati.

BMSC II 15.16-20: ay⁽⁵⁷⁾(. ...)so ś(r)ād(dh)ājātaḥ paryupāsati paryupāsaṃtaḥ
śuśrūṣaṇ(ta)ḥ (6v1) śrotram odahati śrotrām odahaṃnta)ḥ dharmmaṃ śṛṇoti dharm-
maṃ śṛṇvantaḥ dharmmaṃ paryāpuṇati dharmmaṃ paryāpuṇaṃ(taḥ) dharm-
maṃ dhāreti dharmmaṃ dhārentaḥ artha)m upaparīkṣati artham upaparīkṣaṃtaḥ
dharmanidhyānaṃ kṣamat(i) (6v2) dharmanidhyānakṣāṃntīye prāmodyaṃ) jāyati
pramuditasya cchandaḥ jāyati chaṃndajātaḥ utsahati (...)ti prajahaṃtaḥ satyam
anubudhyati.

MN II 173.18-25: saddhājāto [upasaṃkamati] upasaṃkamanto payirūpāsati.
payirūpāsanto sotaṃ odahati. ohitasoto dhammaṃ suṇāti. sutvā dhammaṃ dhāreti.

dhāritānaṃ dhammānaṃ atthaṃ upaparikkhati. atthaṃ upaparikkhato dhammā
 nijjhānaṃ khamanti. dhammanijjhānakkhantiyā sati chando jāyati. chandajāto ussahati.
 ussahitvā tuletī. tulayitvā pahadati. pahitatto samāno kāyena c'eva paramasaccaṃ sac-
 chikaroti. paññāya ca taṃ ativijja passati.

注目すべきは『釈軌論』所引經とギルギット出土『長阿含』写本との関係である。当該箇所のみを見る限り、『釈軌論』（および『釈軌論註』）所引經文は『長阿含』写本と読みがあまり異ならない。またパーリニカーヤとも大幅には異ならない。それに対してスコイエンコレクションとは大幅に読みが異なる。従って『長阿含』写本は『釈軌論』の原語・原文の推定に直接利用しうる資料であることがわかる。

内容的には、この經文は資糧道から究竟道に至る修習の次第を描いている。第一解釈は、信（śraddhā）をもち、尊者に親近した者が、①法を聞く（dharmaṃ śṇoti）→②法を思惟する（dharmaṃ cintayati）→③考量する（tulayati）→④考察する（upaparikkate）→⑤眞実を現前にする（satyaṃ sāṅgātīkaroti）→⑥智慧によって通達する（prajñāyā supratividyati）という過程が描かれている。このうち、①②③は資糧道・加行道、④は見道・修道、⑤は修道、⑥は究竟道に該当する。

第二解釈として挙げられるのは、聞思修からなる三所成慧を①②③④の經句に当て嵌める解釈である。こちらでは、①は資糧道、②は加行道、③は見道、④は修道、⑤修道に、⑥は究竟道に該当する。ヴァスバンドゥ自身が第二解釈として、この經文には「信に依拠して、資糧道と、道果である解脱と、解脱知とが完全に説かれている」と述べているように、「資糧道」「道果である解脱」「それを知らせる解脱知」の三つが主題と目される。

3.3 考察

3.3.1 「撰異門分」との類似性

上記解釈例の冒頭にある經文のうち、括弧内はグナマティによる補足的引用である。ヴァスバンドゥによる引用部分は極僅かであり、自身がその直後に解説する經句すら充分には引用していない。これは、当該經片が当時、当地にお

いては周知のものであったことを意味しよう。ヴァスバンドゥによる、経片冒頭句のみの断片的引用は第二章全体に共通する特徴であることから、ここで題材とされている 103 例はみな、周知された経片であったと推測される。

さらに、この解釈例から明らかであるように、「語義」(3)については「手法」という観点からの考察に意義はない。上の§39のみならず第二章全体を通して見ても、いづれの箇所も「…とは…である／…の意味である」といった単純な語釈法が採られているからである。一方で、こうした単純な語釈法と、その解釈対象が著名経文であるという点は、『瑜伽師地論』『撰異門分』と似ている。事実、第二章における清淨分／雑染分と「撰異門分」における白品／黒品という構成上の類似もさることながら、第二章と「撰異門分」とに共通して語釈されている経文が、確認しえた限りでも 15 例ある。⁽⁶⁰⁾その対応関係を表にして以下に示す。表に記載したのは、第二章の節 (§), それに対応する『百経

第二章§	『百経片』通し番号	「撰異門分」科段	「撰異門分」撰頌
§1	SKhŚ no.2	I.8.viii.B.(1).	「如来」
§2	SKhŚ no.3	I.8.viii.A.(13).	「并天世衆生」
§5	SKhŚ no.6	I.8.viii.C.(3).	「法」 ⁽⁶¹⁾
§6	SKhŚ no.7	I.4.	「四種膳説」
§8	SKhŚ no.9	I.8.viii.C.(4).	「僧」
§9	SKhŚ no.10	II.6.	「煩惱」 ⁽⁶²⁾
§19	SKhŚ no.21	II.7.	「貪」
§47	SKhŚ no.52	I.8.viii.A.(1).	「智」
§60	SKhŚ no.65	I.8.viii.C.(7).	「梵志」
§61	SKhŚ no.66 ⁽⁶³⁾	I.8.viii.B.(2).	「無常想」
§62	SKhŚ no.67	I.8.viii.C.(3).	「法」 ⁽⁶⁴⁾
§78	SKhŚ no.83	I.3.	「二慧」
§79	SKhŚ no.84	I.6.	「施」
§80	SKhŚ no.85	I.7.iv.	「具戒」 ⁽⁶⁵⁾
§100	SKhŚ no.106	C.(6).	「厭」

片』の通し番号 (SKhŚ no.), 向井 [1996: 378-380] における「撰異門分」科段・撰頌である。

さらに、第二章末尾と「撰異門分」末尾の記述も類似しているように思われる。

[VyY][D śi 83b3-4; P si 98a5-6; LEE 161.23-26]

de ltar mdo sde'i dum bu brgya'i tśig rnams kyi don bśad pa ni tśig gi don bśad
pa'i phyogs śig bstan pa'i phyir ro //

phyogs 'dis ni blo dañ ldan pa rnams kyis tśig gźan rnams kyi don yañ brtag par
bya'o //

1) brtag VyY (PL) : dag VyY (D)

以上のように、百からなる経片の、諸語の意味を解説したのは、語義解説の一部を示すためである。

この一部によって、知者たちは他の諸語の意味をも考察すべきである。

[ParyS][D ħi 47b6-7; P yi 56a7-b1]

'di dag ni bdag gi tha sñad mañ po gdags pa'i rnam grañs che loñ mdo sde las
btus nas / don gyi sgo nas yañ yoñs su bstan pa yin gyi / sañs rgyas bcom ldan
'das rnams kyis rnam grañs ston pa ni tśad med do //

phyogs 'di dañ bslab pa 'di dañ bstan pa 'dis kyañ 'di dag dañ rnam grañs gźan
rnams dañ don gyi rnams grañs gźan dag la yañ brtag ciñ yoñs su bstan par bya
/ rnam par gźag par bya'o //

1) che loñ D : che loñ che loñ P 2) gźag D : bźag P

以上は、我が〔法門の〕多くの言説、口訣である異門の粗大なるを、經典から集めて、また意味を入口（門）として、完全に解説したが、仏・世尊たちによる異門の説示は無量である。以上の〔白・黒〕品と、以上の学〔処〕と、以上の解説とによって、さらに、以上の〔諸異門〕とは別の諸異門と、別の諸意味を有する諸異門をも考察した上で、完全に解

説すべきである。〔諸異門の意味を〕確立すべきである。

当該書によって経句の意味を学び、精通した上で、他の経句をも解説すべきだとする点で、両者の記述は共通している。その上、『釈軌論』は「撰異門分」に比してより詳細に、忠実に語義を解釈している。以上の点から、断定はできないが、「語義」(3)の著述に際して「撰異門分」が参照された可能性が推測される。

3.3.2 「語義」(3)の外形的特徴

「語義」(3)の外形的な特徴としては、経句の解釈として複数の解釈が提示されている点が眼につく。当該箇所のように、gžan yañ あるいは mam grañs gžan yañ との接続詞のもと、全 103 例のうち 82 例に対して、ヴァスバンドゥは複数の解釈を提示する。単一の解釈を提示するのは 21 例のみである。これらの事実は、ヴァスバンドゥ活動時において既に、単一の経文解釈はありえなかったことを示している。あるいは、そもそも経文とは複数の解釈を内包するものであるとみなされていた、と推測するのも可能であろうか。

3.3.3 謎の「阿含」

『釈軌論』第二章の冒頭には、ヴァスバンドゥが「語義」(3)を著述する意図が示されている。

[VyY][D śi 40a7; P si 45b4-5; LEE 33.11-13]

'di man chad ni gžan dag la tśig gi don bśad pa la mkhas pa ñid bskyed pa'i
phyir mdo sde'i dum bu kha cig ni ²⁾tśig gi ³⁾don bśad pa'i phyir phyogs phal cher
bstan par bya ste /

1) la VyY (DPL) : las VyYT (DP) 2) ni VyY (D) : gi VyY (PL)

3) gi VyY (D) : ni VyY (PL)

当該〔箇所〕以下は、諸他の人々に語義解説への熟練性 (*kuśalatva) を生じさせるため、幾許かの経片は語義を解説しているため、〔その〕大

部分（概略）が説明されるべきである。

ここで「幾許かの経片は語義を解説しているため」との記述に注目したい。当該箇所⁽⁶⁶⁾のテキストには異読があるものの、第二章には実際に語義を解説する「阿含」(*āgama)が多数引用されている (§3, 5, 8, 14, 22, 25, 33, 44, 62, 63, 64, 66, 67, 68)。同じく語義を解説する「信頼すべき人のことば」(*āptavacana)も二例引用されている (§75, 83)。このうち§64の「阿含」と§75の「信頼すべき人のことば」については堀内 [2013 : 154] がそれぞれ『瑜伽師地論』『摂積分』(VyS Dḥi 49a), 『声聞地』第四瑜伽処 (ŚrBh IV SHUKLA 501) に比定した。

これらの「阿含」は第二章のみならず第一章においても2例ほど引用されているが (上野 [2013 : 12, n.28]), いずれも「阿含」(luñ) と称されつつ、現存する梵文・蔵訳阿含、漢訳四阿含、パーリニカーヤには比定が難しい。多くは『瑜伽師地論』からの引用と予測されるが、現時点では『瑜伽師地論』に平行例を見出せない例も少なくない。出典の比定は今後の課題となる。

なお「阿含」および「信頼すべき人のことば」における語義解釈は、ヴァスバンドゥ自身による語義解釈と見解が一致しない点に特徴がある。

3.3.4 付論：ヴァスバンドゥの三量説

このうち「信頼すべき人のことば」は、ヴァスバンドゥにとっての三つの認識手段 (pramāṇa)⁽⁶⁷⁾ の一つに含まれる。ヴァスバンドゥの三量説に関して付言すれば、第二章 (§79) に推論式と思しき用例がある。

[VyY][D śi 71b6-7; P śi 84b6-7; LEE 127.12-14]

de la dri ma gañ las ser sna 'byuñ ba de'i rgyu de ni ser sna'i dri ma zēs bya ste /
sbyin pa dañ 'gal ba chags pa'i nam pa yin pas 'bras bu'i śiñ lta bu dañ ser ba'i
sprin lta bu'o //

1) rgyu VyY (DPL) VyYT (D) : rgyud VyYT (P)

2) sprin VyY (D) VyYT (D) : sbrin VyY (PL) : spin/srin VyYT (P)

そ〔の経文⁽⁶⁸⁾〕の中で、およそそれから慳が生ずるところの垢という原因が、「慳の垢」と呼ばれる。施与とは矛盾する貪の種類であるから。果樹の如く、電〔を降らす〕雲の如く。

「慳」(*matsara/*mātsarya), すなわち物惜しみを主題とするこの用例を推論式とみなせば、基体(dharmin)は慳を生み出す垢という原因, 特性(dharma)は「慳の垢」, 論証因(hetu)は「貪の種類であること」(自性因)である。ただし喩例については異類例(異喩)を欠いており、同類例も単なる喩えに過ぎず、主張命題が成立しない点に特徴がある。

ヴァスバンドゥと推論式との関係については、桂[2012:14]によれば、『俱舍論』では用いられていない。一方で大竹[2013:172-173, n.13]は、『十地経論』における用例に基づき、ヴァスバンドゥは推論式を知りつつも実際には援用しなかったと推測する。『釈軌論』における上記用例が推論式とみなしえるのかどうか、筆者には判断しかねる。

3.4 まとめ

「語義」(3) 全般にみられる傾向として、[1] 単純な語釈法が採用されている。[2] 著名な経文ばかりが選別されている。[3] ひとつの経文に対して複数の解釈を示している。[4] 語義解釈をする「阿含」あるいは「信賴すべき人のことば」が各解釈の末尾に引用されている、などの諸点がある。これらの点から、『釈軌論』が明らかに初学者を対象としていたことが判明する。

また「語義」(3) に膨大な分量が割かれているのは、「撰異門分」を意識してのことであると推測される。当然ながらその構成もヴァスバンドゥによる独創ではなく、「撰異門分」を踏襲した可能性が高い。註釈対象の選別も同様である。

4 語義 (4)

4.1 先行研究

『釈軌論』第三章の冒頭に位置する「語義」(4)は、同義異語(**paryāya*)、定義(**lakṣaṇa*)、語源解釈(**nirukti*)、分類(**prabheda*)の四項目に視点した語義解釈法である。本稿において概観してきた他の語義解釈法と比較してみても、当該の手法は後代において最も広く普及し、最も深く定着した手法であると言える。「語義」(4)の解説でもって、『釈軌論』における「語義」の解説が完了する。

「語義」(4)は既に多くの先行研究によって言及されている。⁽⁶⁹⁾ただし、それらの先行研究は当該箇所の内容紹介に留まっており、特に考察は加えていない。そこで本節では、まず「語義」(4)を概観した上で、その手法が『瑜伽師地論』『摂積分』ないし『顕揚聖教論』に由来する可能性を確認する。さらに『中辺分別論』第一章「空性」節が当該法と酷似した手法に基づいて記述されていることを確認する。以下の内容は上野[2009: 13-16]の再論であるが、部分的に修正を加えた。

4.2 解釈例

4.2.1 総論

「語義」(4)は総論と各論をもって解説されている。そのうち総論は以下のとおり。

[VyY][D śi 83b4-7; P si 98a7-b2; LEE 162.4-15]

gʒan yañ rnam pa bʒi dag gis tśig gi don rig par bya ste / rnam grañs kyis dañ /
mtśan ñid kyis dañ / nes pa'i tśig gis dañ / rab tu dbye bas so //

de la rnam grañs ni miñ gʒan no //

mtśan ñid ni don gañ la miñ de yod pa'i'o //

nes pa'i tśig ni miñ gi rgyu mtśan brjod pa'o //

rab tu dbye ba ni brjod par bya ba de gzugs can dañ / gzugs can ma yin pa dañ /

bstan du yod pa dañ / bstan du med pa la sogs pa'i mnam par rab tu dbye bas so //
 de ltar na tśig gi don mnam pa thams cad dañ ldan pa yoñs su bstan pa yin la / so
 so yañ dag par rig pa'i rgyu yañ byas pa yin no //

1) rgyu VyY (PL) : sa VyY (D)

さらに、四つの行相 (*ākāra) によって、「語義」は理解されるべきである。〔すなわち、〕①同義異語 (*paryāya) によって、②定義 (*lakṣaṇa) によって、③語源解釈 (*nirukti) によって、④分類 (*prabheda) によって。そのうち、①同義異語とは、別名のことである。

②定義とは、ある対象物にその名 (*nāman) が存在する、〔その対象〕のことである。

③語源解釈とは、〔当該の〕名詞の由来を説明することである。

④分類とは、有色・無色、有見・無見などの種類 (*prakāra) を分類することによって言及されるべきものである。

以上のとおりであれば、あらゆる行相を伴った語義が完全に説明されることになり、無碍解 (*pratisamvid) の因も形成されているのである。

当該の語義解釈法は、ある経句を註釈するに際し、当該語句の同義異語・定義・語源解釈・下位分類を示すことで、当該語句の語義を容易に理解させるためのものである。ただし、註釈に際してこの四点が必ずしも並列的に列挙されるわけではなく、ある経句の註釈に際しては一つが単独で用いられ、また他の経句の註釈に際しては幾つかが併用して用いられる。

続いて、各論として「同義異語」「定義」「語源解釈」「分類」が個別に解説されている。

4.2.2 同義異語 (*paryāya)

[VyY][D śi 83b7-84a2; P si 98b2-4; LEE 162.16-23]

¹⁾gdul ba'i khyad par la ltos nas lan 'ga' ni kha cig bśad par bya ste / bcom ldan
²⁾'das kyis kyañ lan 'ga' ni mnam grañs tsam žig bśad de / dper na rTen ciñ 'brel

bar 'byuñ ba'i mdo las /

de dañ de la³⁾ yañ dag pa ji lta ba bzin du mi šes pa dañ / mi mthoñ ba dañ /
mñon par ma rtogs pa dañ / mun khuñ dañ / kun tu rmoñs pa dañ / ma rig
pa dañ / mun pa gañ yin pa 'di ni ma rig pa žes bya'o

žes 'byuñ ba lta bu'o //

1) gdul VyY (DL) : 'dul VyY (P) 2) ltos (DL) : ltas VyY (P)

3) la VyY (DL) : las VyY (P)

所化の違いに基づいて、或る場合には、或る〔語義〕が解説されるべきである。世尊によっても、或る〔経文〕には、同義異語だけが解説されている。例えば、『縁起経』では、

〔先に説いた〕あれこれに対する、如実に知らないこと、見ないこと、現観しないこと、闇、愚癡、明かりがないこと、くらやみ、これが無明と呼ばれる⁽⁷⁰⁾

と説かれている如く。

4.2.3 定義 (*lakṣaṇa)

[VyY][D śi 84a2-3; P si 98b4-6; LEE 162.24-163.4]

kha cig las ni mtsan ñid tsam žig ste / dper na de ñid las

mam par šes pa'i rkyen gyis miñ dañ gzugs žes bya ba la / miñ gañ že na /
gzugs can ma yin pa'i phuñ po bži dag ste / tšor ba'i phuñ po nas mam par
šes pa'i phuñ po'i bar du'o //

gzugs gañ že na / gañ ci yañ ruñ ste / de thams cad 'byuñ ba chen po bži
dañ dañ / 'byuñ ba chen po bži dag rgyur byas pa ste

žes 'byuñ ba lta bu'o //

1) dag VyY (PL) : om. VyY (D) 2) gañ VyY (DL) : gzugs gañ VyY (P)

3) dañ / 'byuñ ba chen po bži dag VyY (PL) : om. VyY (D)

或る〔経文〕には、定義だけが〔解説されている〕。例えば、その同じ
〔『縁起経』〕では、

「識を縁として名色が〔生ずる〕」という中で、名とは何か。無色
なる四つの蘊である。〔すなわち〕受蘊ないし識蘊である。

色とは何か。およそ何であれ色であるもの、そのすべては、四大種
と四大種所造である。⁽⁷¹⁾

と説かれている如く。

4.2.4 語源解釈 (**nirukti*)

[VyY][D śi 84a3-4; P si 98b6-7; LEE 163.5-8]

kha cig las ni ñes pa'i tśig tsam žig ste / dper na bZa' ba lta bu las

gzugs śiñ gzugs su ruñ bas na de'i phyir gzugs ñe bar len pa'i phuñ po žes
bya'o

žes 'byuñ ba lta bu'o //

或る〔経文〕には、語源解釈だけが〔解説されている〕。例えば『所食
〔経〕』(**Khādanīya*)⁽⁷²⁾では、

「傷めつけられる」, 「傷めつけられる」というわけで、色取蘊と呼
ばれる⁽⁷³⁾

と説かれている如く。⁽⁷⁴⁾

4.2.5 分類 (**prabheda*)

[VyY][D śi 84a4-5; P si 98b7-8; LEE 163.9-16]

kha cig las ni rab tu dbye ba tsam žig ste / dper na

ma rig pa'i rkyen gyis 'du byed rnams žes bya ba la / 'du byed rnams gañ
že na / 'du byed rnams ni gsum ste / lus kyi 'du byed dañ / ñag gi 'du byed
dañ / yid kyi 'du byed rnams so //

'du byed kyi rkyen gyis rnam¹⁾ par śes pa žes bya ba la / rnam par śes pa gañ
že na / rnam par śes pa'i tśogs drug rnams te

žes 'byuñ ba lta bu'o //

tšig gi don bśad zin to //

1) par VyY (DL) : pa VyY (P)

或る〔經文〕には、分類だけが〔解説されている〕。例えば、〔その同じ
『縁起經』では、〕

「無明を縁として諸行が〔生ずる〕」という中で、諸行とは何か。
諸行は三つある。身行と語行と意行である。

「諸行を縁として識が〔生ずる〕」という中で、識とは何か。六識⁽⁷⁵⁾
身である。

と説かれている如く。

「語義」を解説し終えた。

4.3 考察

4.3.1 「摂釈分」ないし『顯揚聖教論』との類似性

さて、当該の語義解釈法はヴァスバンドゥによる創唱ではなく、おそらく
「摂釈分」(**l'vākhyāsamgrahaṇī*) ないし『顯揚聖教論』に由来する。同二文献の
經典解釈法は「法」「等起」「義」「論難・答釈」「次第」の五つの相から構成
されるが、第三相「義」は「要義」と「語義」とに二分される。そのうち、後
者の「語義」解説箇所には次のように記されている。

[VyS][D hi 55a4-5; P yi 65a6-7]

de la tšig gi don kyañ nram pa bžis brjod par bya ste / miñ gi nram grañs bstan
pa dañ / mtsān ñid kyi ño bo ñid kyis lus bstan pa dañ / ñes pa'i tšig bstan pa
dañ / nram pa rab tu dbye bas so //

そ〔の「義」〕のうち、「語義」も四つの行相によって説明されるべきで
ある。①名詞の同義異語の説明と、②定義を本質とする〔語義〕に基づ
く〔經の〕骨格の説明と、③語源解釈の説示と、④種類を分類すること

によって、〔説明されるべき〕である。

[[『顕揚聖教論』][T31, 539a8-9]

當知別義亦有四種。一分別差別名、二分別自體相、三訓釋名言、四義門差別。

「摂積分」らが提唱するこの語義解釈法は、『釈軌論』のそれと逐語的に一致する。したがってヴァスバンドゥはこれらの先行文献に範を得た可能性が高い。ただし「摂積分」と『顕揚聖教論』のいずれに依拠したかは判然としない。さらにはそれ以前の問題として、なぜ『顕揚聖教論』巻十二以降が「摂積分」と同文であるのか⁽⁷⁶⁾という謎も残されている。いずれにせよヴァスバンドゥの簡潔な説明からは、この語義解釈法が自身の創案でないという点が伺われる。

なお「摂事分」(*Vastusaṃgrahāṇī*)においても「同義異語」以下の四項目に基づく区分が言及されているが、その詳細は「摂積分」に譲られている⁽⁷⁷⁾。従って『瑜伽師地論』内部においても、当該の語義解釈法については「摂積分」が優先されていたことがわかる。

4.3.2 『中辺分別論』における類例

当該法と類似した解釈法は『中辺分別論』第一「相品」(*lakṣaṇapariccheda*)の第12偈にもみられる。*sūnyatā*という術語を解説するにあたり、第12偈では *nirukti* を除く三解釈に *pariyāyārtha*, *sādhana* を加えた解釈法が提示されている。

[MAVBh ad MAV I-12][NAGAO 22.17-20]

evam abhūtaparikalpaṃ khyāpayitvā yathā sūnyatā vijñeyā tan nirdiśati.

lakṣaṇaṃ cātha pariyāyas tadartho bheda eva ca /

sādhanaṃ ceti vijñeyam sūnyatāyāḥ samāsataḥ // MAV I-12 //

以上のように虚妄なる分別を解説し終えて、次に空性がどのように理解されるべきかを説く。

要約すれば、定義、同義異語、そ〔の同義異語〕の意味、分類、論証とが、空性に関して知られるべきである。(第一章第12偈)

「相品」は「虚妄分別」(*Abhūtaparikalpa*)と「空性」(*Sūnyatā*)の二つの節に大

別される。上記引用箇所は後者の冒頭部に位置するが、「空性」節は全 11 偈 (kk.12-22) から成る。上に引用した第 12 偈 (当該箇所の註釈は MAVT 46.1-15) は総論に、残りの第 13-22 偈は各論に相当する。具体的には、定義 (k.13), 同義異語 (k.14), そ〔の同義異語〕の意味 (k.15), 分類 (kk.16-20), 論証 (kk.21-22) というように配当されている。

さらにヴァスバンドゥ (及びスティラマティ) は「空性」節の全体を「語義」(padārtha) と「要義」(pinḍārtha) に二分する。総論である第 12 偈を除き、第 13-22 偈を「語義」の四項目に、また第 13 偈のみを「要義」に配当している。このように「空性」節を二分して捉えるヴァスバンドゥ (及びスティラマティ) の理解は、「要義」と「語義」の総体を「義」とみなす「摂積分」を踏襲したものであろうか。

4.4 まとめ

「語義」(4) は **paryāya*, **lakṣaṇa*, **nirukti*, **prabheda* の四項目に視点した語義解釈法である。当該法はヴァスバンドゥによる創案ではなく、「摂積分」などの記述をそのまま踏襲した可能性が高い。ただし『瑜伽師地論』の編者たちによる創案というより、『中辺分別論』にも酷似した方法が確認される点から、当時既に一般化していた方法であったと予想される。「語義」最後部にて簡潔に言及されるに留まった理由もそのためであると推測される。さらに当該法は四例のうち三例までもが『縁起經』から導出されたものであるため、同經と親和性が高く、したがって同經を註釈対象とする『縁起經釈』において多用されてもいる。

そして、当該法の最大の特徴は、經文を解釈するための語義解釈法が、經文自体の中から導き出されている点にある。つまりヴァスバンドゥは、複数の經文の中に法則性を見出し、その法則性に基づいて經文を解釈する方法を提案している。この点は『釈軌論』全体を貫く特徴でもあり、その一部は本論において随所に確認したとおりである。

なおこの「語義」(4) は、後代のチベットにおいては語義解釈の範疇を越え、

歴史書や宗義書における学説の記述法として定着するに至る⁽⁷⁸⁾。

おわりに

以上、主に「手法」という観点から『釈軌論』における「語義」を概観した。

(1) より (4) までの議論を通して、以下の点が確認しうる。

[1]「語義」(1) (2) (4) は、經典の中から語義解釈法が導出されている。言い換えれば、それらの手法は經典自体に採用されていたものである。

[2]「語義」(1) では意図的に用例の収集範囲が有部阿含と有部律に限定されている点から、經句の語義をあくまで經典内部から導出しようとした意図が伺われる。

[3]「語義」(2) (3) から言えることは、經句・經文は単一の語義のみが許されるのではなく、むしろ、単語にせよ文章にせよ、複数の語義が含まれたものとみなされている。多義を有する經句・經文から単一の語義を抽出すべきか、あるいは多義性の保持を意図した經句・經文として解釈すべきかは、說法者の判断(說法者がいかにして世尊の意図を趣意 *abhiprāya* するか)に委ねられている。

[4]「語義」(2) によれば、「標挙・詳説」と「数的表現」には多様な目的が含まれている。經句・經文の解釈に際していかなる目的を見出すかは說法者の判断に委ねられているものの、標挙・詳説、すなわち広義での「異門」および数的表現を伴う經句・經文は、多様な目的を含むものとみなされている。それらが含まれている理由としては、「異門」に関しては所化の多様性(多様な所化の教化)が焦点となり、「標挙・詳説」と「数的表現」に関しては不理解と忘失の防止が焦点となっている。

さらに、『釈軌論』研究の観点から注目される点は以下のとおり。

[5]「語義」(3) と (4) とに関しては、それぞれ『瑜伽師地論』『摂異門分』と「摂積分」(ないし『顕揚聖教論』)の存在が前提であると推測される。

「語義」(4) は極めて簡潔な手法であるため、「語義」(2) の後に論じられてもよいはずである。しかしそうした選択がなされていないのは、当該法が「摂

釈分」由来のものであったから、と推測することも可能であろうか。

[6] 解釈例はいずれも著名経文であり、その手法も簡易なものであることから、明らかに初学者を対象としている。

[7] 「語義」の議論を通して確認しうもうひとつの事実は、かかる用例の中に大乘經典からの引用例が一例も見出されない点である。無論『釈軌論』第四章における大乘仏説論が示すように、ヴァスバンドゥは幾多の大乘經典を引用し、さらにそのごく一部を了義として認めている。しかし『釈軌論』においては、大乘の経文それ自体を解釈例として提示したり、解釈の対象として採用することはしない。

謝辞

「ヴァスバンドゥの經典解釈法」と題する一連の拙稿（本稿を含めて現時点で二つを本誌に掲載済）は、筆者の課程博士論文の一部である。その拙論の作成より論文審査に至るまで、兵藤一夫名誉教授（大谷大学）にご指導いただいた。ここに記して、衷心より感謝の意を表する。

略号と参考文献

BMSC Buddhist Manuscripts in the Schøyen Collection.

D Derge (sDe dge) blockprint edition of the Tibetan Tripiṭaka.

DĀ *Dīrghāgama*.

HONJŌ no. 本庄 [1984] における『俱舍論』および『ウパーイカー』所依阿含の通し番号。

L / LEE LEE Jong Choel's Tibetan edition of the *Īyākhyāyukti* = LEE [2001].

N Narthang (sNar thang) blockprint edition of the Tibetan Tripiṭaka.

P Peking (Kangxi 1717/20) edition of the Tibetan Tripiṭaka kept in the Otani University, Kyoto.

SHT Ernst WALDSCHMIDT et al., *Sanskrihandschriften aus den Turfanfunden*. Wiesbaden/Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1965ff.

SWTF Heinz BECHERT et al., *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden und der kanonischen Literatur der Sarvāstivāda-Schule*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1973ff.

T 高楠順次郎、渡邊海旭 [編], 大正新脩大藏經。東京：大正新脩大藏經刊

行會, 1924–1932.

UENO UENO Makio's Tibetan edition of Chapter 1 of the *Vyākhyāyukti* = 上野 [2013: 26f.].

一次文献

パリー仏典の略号については *A Critical Pāli Dictionary* の *Epilegomena* に従う。

テキストは The Pāli Text Society 版を用いる。

- AAĀ *Abhisamayālaṃkāṛālokā* (Haribhadra): WOGIHARA Unrai (Ed.), Tokyo 1932–1935; P.L. VAIDYA (Ed.), Darbhanga 1960.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): Pralhad PRADHAN (Ed.), Patna 1967.
- AKUp *Abhidharmakośaṭṭhakopayikā* (Śamathadeva): D no.4094; P no.5595.
- AKVy *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra): WOGIHARA Unrai (Ed.), Tokyo 1932–1936.
- ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya* (Jinaputra?): Nathmal TATIA (Ed.), Patna 1976.
- AvDh *Arthavastaro nāma dharmaparyāya*. D no.318; P no.984.
- AVN *Arthaviniścayanibandhana* (Vīryaśrīdatta): Narayan Hemandas SAMTANI (Ed.), Patna 1971.
- Avś *Avadānaśataka*. Jacob Samuel SPEYER (Ed.), St. Petersburg 1902–1909.
- Bu ston *Bu ston chos 'byun*. Lokesh CHANDRA (Ed.), New Delhi 1971.
- Daśo *Daśottarasūtra*. Kusum MITTAL (Ed.), Berlin, 1957 (I–VIII); Dieter SCHLINGLOFF (Ed.), Berlin 1962 (IX–X).
- MAVBh *Madhyāntavibhāgaḥbhāṣya* (Vasubandhu): NAGAO Gadjin (Ed.), Tokyo 1964.
- MAVṬ *Madhyāntavibhāgaṭṭhikā* (Sthiramati): YAMAGUCHI Susumu (Ed.), Nagoya 1934.
- MSAṬ *Mahāvānasūtrālaṃkāṛaṭṭhikā* (*Asvabhāva): D no.4029; P no.5530.
- Mvy (IF) *Mahāvīyūtpatti*. ISHIHAMA Yumiko and FUKUDA Yōichi (Eds.), Tokyo 1989.
- NidSa *Nidānasamṃyukta*. Chandrabhāl TRIPĀṬHĪ (Ed.), Berlin 1962.
- ParyS *Paryāyasamgrahaṇī*. D no.4041; P no.5542.
- Pravṛ IV *Pravrajyāvastu*. Claus VOGEL and Klaus WILLE (Eds.), Göttingen 2002.
- PS *Pramāṇasamuccaya* (Dignāga): Ernst STEINKELLNER (Ed.), *Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter 1*. www.oeaw.ac.at/ias/Mat/dignaga_PS_1.pdf
- PSĀVN *Pratītyasamutpāḍādivibhaṅganirdeśa*. P.L.VAIDYA (Ed.), *Mahāvānasūtrasamgraha* Part 1, Darbhanga 1961: 117–8.
- PSĀVN (Tib.) *rTen ciñ 'brel bar 'gyur ba dan po dan rnam par dbye ba bstan pa*. DE JONG [1974: 146–9] (= [1979: 246–8]).
- PSVy *Pratītyasamutpāḍavyākhyā* (Vasubandhu): TUCCI [1930] (= [1971]).
- PSVyṬ *Pratītyasamutpāḍādivibhaṅganirdeśaṭṭhikā* (Guṇamati): D no.3996; P no.5497.
- PVA *Pramāṇavārttikālaṃkāra* (Prajñākaragupta): Rāhula SĀṆKṚTYĀYANA (Ed.), Patna 1953.

- ŚrBh I *Śrāvakabhūmi*. 声聞地研究会 (Ed.), Tokyo 1998.
- ŚrBh IV *Śrāvakabhūmi*. Karuṇeśha SHUKLA (Ed.), Patna 1973.
- SBhV *Saṅghabhedavastu*. Raniero GNOLI (Ed.), Roma 1977, 1978.
- SKhŚ *Iyākhyāyuktisūtrakhaṇḍasāta*. D no.4060; P no.5561.
- ST *Sārottamā* (Ratnākaraśānti): Padmanabh S. JAINI (Ed.), Patna 1979.
- VyS **Iyākhyāsamgrahaṇī*. D no.4042; P no.5543.
- VyY *Iyākhyāyukti* (Vasubandhu): D no.4061; P no.5562; LEE [2001].
- VyYT *Iyākhyāyuktiṭīkā* (Gunaṃati): D no.4069; P no.5570.

二次文献

石川美恵

1993『二巻本訳語釈——和訳と注解——』東京：東洋文庫。

上野牧生

2009「『釈軌論』の経典註釈法とその典拠」『佛教学セミナー』89: 1-21.

2010「『釈軌論』における阿含経典の語義解釈法 (1)」『印度哲学仏教学』25: 71-84.

2012a「『釈軌論』における阿含経典の語義解釈法 (2)」『佛教学セミナー』95: 1-35.

2012b「ヴァスバンドゥの経典解釈法 (2) —要義 (*pinḍārtha*) —」『佛教学セミナー』96: 1-50.

2013「『釈軌論』における阿含経典の語義解釈法 (3)」『佛教学セミナー』97: 1-48.

大竹晋

2013『元魏漢訳ヴァスバンドゥ釈経論群の研究』東京：大蔵出版。

小谷信千代

2000『法と行の思想としての仏教』京都：文栄堂。

片山一良

2000『中部 (マッジマニカーヤ) 中分五十経篇 2』東京：大蔵出版。

桂紹隆

2012「仏教論理学の構造とその意義」『シリーズ大乘仏教 9 認識論と論理学』東京：春秋社, 3-48.

佐久間秀範

1996『タティア校訂版『阿毘達磨雜集論』梵語索引およびコリゲンダ』東京：山喜房佛書林。

櫻部建

1969『俱舍論の研究界・根品』京都：法藏館。

2003「法と法性」『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』17: 17-27.

声聞地研究会

1998『瑜伽論声聞地第一瑜伽処—サンスクリット語テキストと和訳—』東京：山喜房
佛書林。

鈴木健太

2009「『現観莊嚴論光明』における「如来十号」の解釈について」『印度哲学仏教学』
24: 120-135.

中御門敬教

2008「世親作『仏随念広註』和訳研究：前半部分・仏十号に基づく三乗共通の念仏
観」『佛教大学総合研究所紀要』15: 105-130.

2010「無着作『仏随念註』と『法随念註』和訳研究」『佛教大学総合研究所紀要』17:
67-92.

野澤静証

1954「静弁造『中観学心髄の疏・思釈炎』「真如智を求むる」章 第三（Ⅱ）」『密教
文化』29/30：9-21.

藤仲孝司

2008「世親作『仏随念広註』和訳研究：後半部分・大乘特有の念仏観」『佛教大学総
合研究所紀要』15: 131-152.

2010「無着作『僧随念註』の和訳研究」『佛教大学総合研究所紀要』17: 93-114.

船山徹

2012「真諦の活動と著作の基本的特徴」『真諦三藏研究論集』京都：京都大学人文科
学研究所，1-86.

堀内俊郎

2004「『釈軌論』における三三昧—『声聞地』との比較を通じて—」『インド哲学仏教
学研究』11: 57-70.

2006「十二分教考—瑜伽行派における sūtra, avadāna, vaipulya, upadeśa 解釈—」『仏教
文化研究論集』10: 3-28.

2007「瑜伽行派におけるウダーナとニダーナ—十二分教と三蔵の包摂関係から—」
『哲学・思想論集』33: 78-65.

- 2009『世親の大乗仏説論—『釈軌論』第四章を中心に—』東京：山喜房佛書林。
 2013「『釈軌論』第二章経節（62）—（63）訳注」『国際哲学研究』2: 153-164.
 2013a「仏教における法概念の多様性：思想史的観点から」『国際哲学研究別冊2
 〈法〉概念の時間と空間』。

本庄良文

- 1984『俱舎論所依阿含全表Ⅰ』京都：私家版。
 1989『決定義経・註：梵文和譯』京都：私家版。
 2001「『釈軌論』第一章（上）世親の經典解釈法」『香川孝雄博士古稀記念論集：仏
 教学浄土学研究』京都：永田文昌堂，107-120.

箕浦暁雄

- 2007「分位縁起の正当性に関する『順正理論』の議論」『大谷學報』86-2: 18-29.

宮下晴輝

- 1983「アビダルマ教義学の一局面—『俱舎論』から『釈軌論』への展開例」『大谷學
 報』63-1: 1-16.

向井亮

- 1979「『顕揚聖教論』と『瑜伽師地論』」『仏教学』8: 39-68.
 1996「『瑜伽師地論』「摂积分」「摂異門分」の結構—uddāna 頌による科判—」『今西
 順吉教授還暦記念論集：インド思想と仏教文化』東京：春秋社，369-380.

室寺義仁

- 2006「『阿毘達磨俱舎論』における‘utsūtra’」『印度学仏教学研究』54-2: 958-954.

李鐘徹

- 2001『世親思想の研究—『釈軌論』を中心として—』東京：山喜房佛書林。

山口益

- 1959「世親の釈軌論について」『山口益仏教学文集』下，東京：春秋社，1973，
 153-188.

印順（Yinshun）

- 1983『雜阿含經論會編 上編』臺北：正聞出版社，1983.

BREKKE, Torkel

- 2000 “The Camgīsūtra of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādins,” *Buddhist Manuscripts in the
 Schøyen Collection* vol.I, Oslo: Hermes Publishing, 53-62.

CHUNG, Jin-il (鄭鎮一)

2008 *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama*. Tokyo: The Sankibo Press.

HARTMANN, Jens-Uwe

2002 "More Fragments of the Caṅgīsūtra," *Buddhist Manuscripts in the Schøyen Collection* vol.II, Oslo: Hermes Publishing, 1-16.

2004 "Contents and Structure of the *Ādīśāgama* of the (Mūla-) Sarvāstivādins," *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 7: 119-137.

DE JONG, Jan Willem

1974 "A propos du Nidānasamyukta," *Mélanges de Sinologie offerts à Monsieur Paul Demeuvre*, II, Paris: Presses universitaires de France, 137-149. (Reprint: *Buddhist Studies*, Berkeley: Asian Humanity Press 1979, 237-249).

KRITZER, Robert

2005 *Vasubandhu and the Yogācārabhūmi: Yogācāra elements in the Abhidharmakośabhāṣya*. Tokyo: IIBS.

LEE, Jong Choel (李鐘徹)

2001 *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu, critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking editions*. Tokyo: Sankibo Press.

NANCE, Richard F.

2012 *Speaking for Buddhas: Scriptural Commentary in Indian Buddhism*. New York: Columbia University Press.

OBERMILLER, Eugène

1931 *History of Buddhism (Chos-hbyung) by Bu-ston*. Part 1, Materialien zur Kunde des Buddhismus Heft 18, Heidelberg: Institut für Buddhismus-Kunde.

Prapod ASSAVAVIRULHAKARN and SKILLING, Peter

1999 "Vasubandhu on Travel and Seclusion," *Manusya. Journal of Humanities*, 2-1 (Chulalongkorn University, Bangkok): 13-24.

SAMTANI, Narayan Hemandas

1971 *The Arthaviniścaya-sūtra & its commentary "Nibandhana"*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute.

SKILLING, Peter

2000 "Vasubandhu and the *Vyākhyāyukti* Literature," *Journal of International Association of Buddhist Studies* 23-2: 297-350.

TUCCI, Giuseppe

1930 "Fragment from the *Pratītyasamutpāda-vyākhyā* of Vasubandhu," *Journal of Royal Asiatic Society* 1930: 611-630. (Reprint: *Opera Minora* parte I, Roma 1971, 277-304.)

VERHAGEN, Pieter C.

2005 "Studies in Indo-Tibetan Buddhist Hermeneutics (4): The *Vyākhyāyukti* of Vasubandhu," *Journal Asiatique* 293: 559-602.

WILLE, Klaus

2013 "Survey of the Sanskrit Manuscripts in the Turfan Collection (Berlin)," *From Birch Bark to Digital Data*. Vienna: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 187-212.

YAMABE Nobuyoshi (山部能宜)

1997 "An Shigao as a Precursor of the Yogācāra Tradition: A Preliminary Study," 『佛教思想文化史論叢渡邊隆生教授還暦記念論集』 京都：永田文昌堂, 153-194.

注

- (1) このうち「要義」(*piṇḍārtha*) については上野 [2012b] にて取り上げた。
- (2) *Bu ston chos 'byuñ* 7a4-b2: *dañ po ni / chos zes pa'i sgra de don bcu la 'jug ste / rNam bśad rigs par /*
chos ni šes bya lam dañ ni //
mya ñan 'das dañ yid kyi yul //
bsod nams tše dañ gsuñ rab dañ //
'byuñ 'gyur ñes dañ chos lugs la'o //
zes pas / chos gañ la 'dus byas sam 'dus ma byas sam zes pa šes bya dañ / yañ dag pa'i lta ba ni chos yin no zes pa ltar lam dañ / chos la skyabs su soñ ba zes pa myañ 'das dañ / chos kyi skye mched ces pa yid yul dañ / btsun mo'i 'khor dañ gžon nu rñams dañ lhan cig chos spyod ces pa bsod nams dañ / byis pa ni mthoñ ba'i chos gces par 'dzin pa yin zes pa tše dañ / chos šes pa ni 'di lta ste / mdo'i sde dañ zes pa lta bu gsuñ rab dañ / lus 'di rga ba'i chos yin no zes pa 'byuñ 'gyur dañ / dge sloñ gi chos bži zes pa lta bu ñes pa dañ / yul chos rigs chos

zes pa chos lugs te bcu la 'jug go /

de dag kyañ gtso che ba'i dbañ du byas kyi / der 'dus pa ma yin te / chos kyi chos tsol bar
byed de / chos ma yin pas ma yin no // zes pa lta bu rigs pa la chos dañ / bsgrub bya'i chos /
dgag bya'i chos / zes pa la sogs pa la'añ 'jug pas so //

- (3) 『釈軌論』当該箇所は一部、『集量論』、『現觀莊嚴光明論』（鈴木 [2009 : 123]）、『決定義經註』（本庄 [1989 : 126-7]）、『量評釈莊嚴』（『集量論』からの孫引きか）および『最上真髓』（『現觀莊嚴光明論』からの孫引きか）に引用されている。
PS 1.5-7: svārthasampat sugatatvena trividham artham upādāya praśastavārtham surūpavat, apunarāvṛtyartham sunaṣṭajvaravat, niḥśeṣārtham supūrnaghaṭavat.; AAĀ WŌGIHARA 184.5-8, VAIDYA 352.11-13: tathā hi lokottareṇa mārgēṇa śobhanam jñānaprahāṇasampadam gataḥ sugataḥ surūpavat. apunarāvṛtṭyā vā suṣṭhu gataḥ sugataḥ sunaṣṭajvaravat. niḥśeṣam vā gataḥ sugataḥ suparipūrnaghaṭavat.; AVN 244.1-3: **sugata** ity anena yathāgantavyam gatas taṃ darśayati. suṣṭhu gataḥ sugato 'punarāvṛtṭyarthena, sunaṣṭajvaravat. niḥśeṣam vā gataḥ sugataḥ niḥśeṣajñeyagamanārthena, supūrnaghaṭavat.; PVA 1.15-17: svārthasampat sugatatvena trividham artham upādāya, praśastatvam surūpavat, apunarāvṛtṭyartham sunaṣṭajvaravat, niḥśeṣārtham supūrnaghaṭavat.; ST 32.4-5: gataḥ punarbhavāt muktaḥ. suśabdaḥ praśastāpunarāvṛtṭiniḥśeṣārthaḥ, surūpavat sunaṣṭajvaravat supūrnaghaṭavac ca.
- (4) 『雜阿含經』第 490 經に平行する經文である。T2, 126a22-27: 閻浮車問舍利弗。
（中略）云何名爲世間善逝。舍利弗言。（中略）若貪欲已盡無餘斷知、瞋恚愚癡已盡無餘斷知、是名善逝。
- (5) 『現觀莊嚴光明論』以下から回収される梵原語は jvara であるが、『釈軌論』のチベット語訳は gcin nad「尿病」である。ここでは梵原語に従って訳した。
- (6) 『出家事』に類似表現が見られる。Pravṛ-v IV 33: sa smitapūrvam gamo bhagavati labdhaprasāda udānam udānam. aho buddha, aho dharma, aho saṃgha. aho dharmasya svākhyātātā.
- (7) 『破僧事』に平行箇所がある。SBhV I 9.8-9: antarhite pṛthivīrase te satvāḥ saṃgamya samāgamya śocanti klāmyanti paridevante. evaṃ cāhur aho rasa aho rasa iti. SBhV 当該箇所は『中阿含經』第 154 經「婆羅婆堂經」と平行し（T1, 674c24-26: 地味滅已、彼衆生等便共聚集、極悲啼泣而作是語、奈何地味、奈何地味。）、同経は『ウパーイカー』にも引用されている。AKUp HONJŌ no. 3104, D ju 193a6-7; P tu 221a1-2: sa'i ro(P:žag) de nub pa dañ sems can de dag 'dus śiñ tsoṅs nas 'di shad du kyi hud ro zes ñam thag pa'i smre sñags 'don to //(P: te /)
- (8) 出典不詳。
- (9) 出典不詳。
- (10) ただし上引した『釈軌論』第二章§94における *su*、および『緣起經釈』「異部決択」における \sqrt{kr} （次注参照）などは、後者の説明に先立って「 \sqrt{kr} という〔語〕の意味は、世間において多様に現れる」（byed ces bya ba'i don yañ 'jig rten na nram par mañ du snañ, PSVy D chi 59a5）と但し書きがなされているように、用例の

収集対象が有部阿含・有部律に求められていない。この点は「語義」(1)の14術語と全く異なる。

- (11) 『縁起経釈』においては「無明支」における *avidyā* の接頭辞 *a-* の七義 (D chi 7a4-b1), 「名色支」冒頭における *vijñāna* の接頭辞 *vi-* の四義 (D chi 24a2-4), 「異部決択」における **√kr* の七義 (D chi 59a5-7) など。
- (12) 船山 [2012: 33-4] を参照。
- (13) NANCE [2012: 138-48] では本文に付された注番号と文末注における注番号とがひとつづつずれている。そのため本文 p.147, no.41 は、文末注 p.252, no.42 に対応する。このずれは本文 p.138 に注 no.25 という表記が誤って二つある点に起因するが、本文 p.148 に注 no.47 の表記を欠いていることから、奇しくも p.148, no.48 以降はずれが解消されている。
- (14) 以下の二例を含めた当該三語の想定原語は山口 [1959: 174] に基づく。
- (15) 『釈軌論』第一章における「目的」(*prayojana*) 定義箇所 (VyY LEE Ed. 9.13) などに既出の経文である。正確な出典は不明であるが、*Avadānaśataka* や *Divyāvadāna* に平行箇所がある。Avś I 205.5-7: *aśrāddhaṃ mātāpitarāṃ śraddhāsāmpadī samādāpayati vinayati niveśayati pratiṣṭhāpayati. duḥśīlaṃ śīlasāmpadī matsariṇaṃ tyāgasāmpadī duṣprajñāṃ prajñāsāmpadī samādāpayati vinayati niveśayati pratiṣṭhāpayati.*
- (16) 標挙 (*uddeśa*) と詳説 (*nirdeśa*) は、*Arthaśāstra* から *Yuktīdīpikā* に至るまで説かれる伝統的な手法である。伝 Kauṭhilya 作 *Arthaśāstra* の最後部で説かれる、三十二種からなる *tantrayukti* (学術書の方法) にも、その第6、第7項目にそれぞれ挙げられている (KANGLE² 280.21-24)。さらに *Īśvaraḥṣṇa* の *Yuktīdīpikā* においても、十種からなる *tantraḡuṇasāmpatti* (教義の完成要件) の第7、第8項目にそれぞれ挙げられている (WEZLER and MOTEGI 7.6f.)。それらの用法は『釈軌論』のそれに等しい。
- (17) NidSa 14.2: *pratītyasamutpādaḥ katamaḥ. yad utāsmin satīdaṃ bhavaty asyotpādād idam utpadyate.*
- (18) NidSa 14.2: *yad utāvidyāpratītyayāḥ saṃskārā ...*
- (19) NidSa 16.2: *pratītyasamutpādasāyādīḥ katamaḥ. yad utāsmin satīdaṃ bhavaty asyotpādād idam utpadyate.;* 16.3: *vibhaṅgaḥ katamaḥ. avidyāpratītyayāḥ saṃskārā ity avidyā katamā.*
- (20) 『縁起経釈』当該箇所は、ほとんど逐語的に『決定義経註』に用いられている。AVN 73.4-10; 本庄 [1989: 40-41] を参照。
- (21) 『釈軌論』第二章 §5, §6, §7, SKhŚ nos.6, 7, 8 に相当する。
「世尊の法は、善く説かれたものであり、目の当たりにするものであり、…」
(**svākhyāto bhagavatā dharmāḥ sāmpr̥ṣṭikāḥ ...*)
「世尊によって善く説かれた法律は、善く見極められたものであり、…」
(**svākhyāto bhagavato dharmavinayaḥ supraveditāḥ ...*)
「比丘たちよ、わたしの法は、善く説かれたものであり、平易であり、明快であり、…」(**svākhyāto me bhikṣavo dharmāḥ, uttānaḥ, vivṛtaḥ ...*)
- (22) AVN 248.6 ≡ VyY LEE 41.15-16: *de la phyin ci ma log par yañ dag par gsuñs pa'i phyir legs par gsuñs pa'o //.*

- (23) *Dīrghāgama* 所属の *Arthavistara* が^g出典である。AvDh D su 188b3-4; P śu 198a4: de ltar na tse dañ ldan pa dag dal ba tśogs pa bcu gñis po 'di dag ni 'phags pa'i chos 'thob par 'gyur ba yin no //; 『仏説普法義経』 (no.98) T1, 922b18-19: 是爲賢者十二時聚會。; 『広義法門経』 (no.97) T1, 919c08: 長老。是十二種。
- (24) 有暇 (kṣaṇa) の自他円満としてグナマティが^g列挙する語句は、『声聞地』「第一瑜伽処」におけるそれと一致する。ŚrBh I 10.1-16.2 (声聞地研究会 [1998: 10-16]) 参照。さらに『声聞地』の冒頭に説かれる「自他円満」は、有部阿含の『長阿含』(六経品)に属する『広義法門経』(*Arthavistaradharmaparyāya*)に基づくことが^g, YAMABE [1997: 162-169]; 声聞地研究会 [1998: vi-viii] により指摘されている。
- (25) 『釈軌論』当該箇所における有暇 (kṣaṇa) の議論 (〔例4〕) と内容を共有する『阿毘達磨集論』の用例がある。ASBh 142.15-17: āṅgopāṅgamukhaṃ yatraitena padenoddeśaḥ śeṣair nirdeśa iti pradarśyate tadyathā dvādaśakṣaṇa**saṃnipātadeśanāyām ātmasampatparasampad ity anayor dvayor yathākramaṃ pañcabhiḥ pañcabhir uttaraiḥ paidair nirdeśa iti.
- ** チベット語訳 (dal ba) に基づき, TATIA: kṣaṇa- を kṣaṇa- に訂正する (佐久間 [1996: corrigenda] に記載なし)。
- 「總別門とは、そこにおいて、第一の語によって標挙が^g, 残り〔の語〕によって詳説が〔それぞれ〕明示されるところのものである。例えば、十二暇 (dvādaśakṣaṇa) の集合が説かれる場合、自円満・他円満というこの二つ〔の標挙〕に対して、順番通りに、それぞれ五つの後続する語によって、詳説が〔明示される〕。」
- (26) グナマティは『釈軌論註』と『縁起経釈註』とにおいて「異門」の機能・役割を説明する。つまり「異門」とは、第二番目以降の異門は第一番目の異門を理解させるためのものと説明する。VyYṭ D si 143b6-7; P i 7a2-3: tśig gcig la yañ don du mar 'dren (P 'gren) pa'i phyir ji ltar na nmaṃ graṇs dañ po gsal bar byed pa nmaṃ graṇs gñis pa la sogs pas nmaṃ graṇs dañ po'i don śes par 'gyur žig gu žes don gzan du rtog pa bsal ba'i phyir nmaṃ graṇs su gsuñs so // 「一つの語にも多義が混在しているため、[どうか、第一の異門〔の意味〕を明らかにするとところの、第二などの異門によって、第一の異門の意味が知られますように]と〔世尊はお考えになって〕、〔所化が〕異なった意味で理解してしまうのを防ぐため、〔世尊は〕異門をお説きになられたのである。」; PSVyṭ D chi 95a4; P chi 112a6-7: de bas na nmaṃ graṇs kyi tśig ni don tha dad pa yin par nmaṃ par rtog pa bsal bar bya ba'i phyir ro // ji lta že na / nmaṃ graṇs gñis pa la sogs pas ni nmaṃ graṇs dañ po'i don kho na śes par byed pa'i phyir ro // 「したがって、異門である語が^g, 異なった意味で理解されてしまうのを防がなければならないからである。どうのようか。第二番目をはじめとする異門によっては、第一番目の異門のみを知らしめるからである。」
- (27) AAĀ WOGIHARA 9.4; VAIDYA 273.1: saṃkhyeyāvadhāraṇārtham.
- (28) Cf. AAĀ WOGIHARA 9.5; VAIDYA 273.1: prabhūtārthasya samāsasaṃkhyagrahaṇāvimaraṇāt sukhāvabodhārtham.

- (29) 『中阿含經』第93經などに平行箇所がみられる。『水淨梵志經』, T1, 575a25-b3: 若有二十一穢汚於心者。必至惡處生地獄中。
- (30) Daṣo I.1: eko dharmo bahukara ya(d)u(ta / apramādaḥ kuśale)(2.5)ṣu (6.1) dharmeṣu /.
- (31) Daṣo X.1: (daśa dharmā bahukarā)ḥ / daśa nāthakarak(ā dharmāḥ).
- (32) *Vinayavastu* に平行箇所多数。以下その一例: SBhV I 171.19: yena śrāvastī tena cārikāṃ prakrāntaḥ; II 56.18-19: atha bhagavān yathābhiramya rājagrhe vihr̥tya yena śrāvastī tena cārikāṃ prakrāntaḥ.
- (33) 総括偈第5・6偈は『現觀莊嚴光明論』に引用されている。AAĀ WOGIHARA 7.19-22; VAIDYA 271.30-272.2:
 deśāntaravineyārthaṃ tatsthānāṃ tarpaṇāya¹ ca
 śrāvakānekavāsārthaṃ anāsakteś ca darśane² //
 deśānāṃ caityabhāvārthaṃ puṇyārthaṃ caiva dehināṃ
 ityādiśamanārthaṃ³ ca buddhaś caratī cārikāṃ //
¹tatsthānāṃ tarpaṇāya VAIDYA: tatsthānāścaryaṇāya WOGIHARA
²anāsakteś ca darśane WOGIHARA: anāsaktiṃ ca darśayan VAIDYA
³ityādiśamanārthaṃ WOGIHARA: ityādiñjāpanārthaṃ VAIDYA
- (34) 「…とは何か」(… katamat)との構文のもとに「…」の語義要素を残らず列举する語義解釈法を、ヴァスバンドゥは「定義」(*lakṣaṇa*)と呼ぶ。本稿4.2.3を参照。
- (35) 当該文脈における「身体」の円満は「健康」「長寿」を, 「享受」の円満は「財産」「欲望の対象」を, 「繁栄」は「善趣に生まれること」を, 「至福」は「聖道に入ること」をそれぞれ指すと推測される。
- (36) 「その時点」とは第一の異門が説かれた時, 「後の時点」とは第二以降の異門が説かれた時を指すであろうか。
- (37) この3. に関してのみ, 『決定義経註』に類似表現が見られる(本庄[1989: 62])。AVN 110.10-11: tatkalavikṣiptānāṃ paryāyeṇa tadarthaśravaṇārthaṃ. tenaivābhidhānenānyeṣāṃ avagataṃ¹ syād ity evamādīni bahūni prayojanāni granthabhārabhayaṭ nocyante.
¹SAMTANI: avaśītaṃ (?). Cf. 本庄[1989: 173].
 「その時点で, [心が] 散乱している人々に, 異門によってその意味内容を聞かせるため, その同じ[意味内容を有する]表現によって, 他の[心が] [散乱していない] 人々が理解するであろう[ということを示すため]などの多くの目的は, 書籍が膨大になることを恐れて[全てには] 言及しない。」
 ここでヴィーリヤシュリーダッタが述べる「多くの目的」が『釈軌論』当該箇所を指すことに疑いはない。
- (38) 以上の『釈軌論』の記述のうち5., 7., 8. について, グナマティは以下のように註釈する。VyYT D si 143b6-144a2; P i 7a2-6:
 「5. 一つの語にたくさんの意味があるから, 異なった意味で理解してしまうのを防ぐためとは, 一つの語にも多義が混在しているため, 「どうか, 第一の異門[の意味]を明らかにするところの, 第二などの異門によって, 第一の異門の意味が知られますように」と[世尊はお考えになって], [所化が] 異なった意味で理解してし

まうのを防ぐため、〔世尊は〕異門をお説きになられたのである。

7. 〔世尊〕ご自身に法無礙解がそなわっていることを示すためとは、如来の説法がそのように無量であり、法に関する文（*vākya）と文字（*akṣara）もそのように無量であり、聖（無漏）なる智慧（*prajñā）と弁才（*pratibhāna）もそのように無量であると、世尊ご自身に法無礙解がそなわっていることを示すためである。

8. 他の人々にその種子を植え付けるためとは、他の聴聞者らに、〔世尊が〕お説きになられた異門の種子を植え付けるため、という意味である。〕

グナマティによる別著『縁起経釈註』にも当該箇所と平行する次の言及がある（**ボールド体**は註釈対象である『縁起経釈』の語句であることを示す）。

PSVyT D chi 95a3-b1; P chi 112a5-b4:

「一つの語にたくさんの意味があるから、異なった意味で理解してしまうのを防ぐためとは、一つの語の中にも、多くの意味がまさしく存在する〔語の例〕がみられる。例えば、go という語、それは、ことば（*vāk）、方角（*dik）、土地（*bhū）など九つ〔の意味〕で用いられる。したがって、異門である〔この〕語が、異なった意味で理解されてしまうのを防がなければならないからである。どうのようにか。第二番目をはじめとする異門によっては、第一番目の異門のみを知らしめるからである。

説法者らは、獲得されるべきそ〔の語〕の意味と、適用される語との双方に資助しなければならないのとは、よく知られている諸語義は、異門が述べられた場合に、状況〔に応じた〕意味（skabs kyi don）の獲得に資助するはずである。

あるいは、聴聞者の違いにより、ある〔聴聞者〕にはある語義が知られている。文字を書き記す（*akṣaranyāsa）のは、初めに確立し、中程に確立し、終わりに確立し、軽重（*guru-lāghava）があるから、ある〔聴聞者〕には、ある語を結び付けることに資助するからである。

〔如来〕ご自身が無礙解であると語られるべきでありとは、〔まさしく〕そのように、如来の説法は無量である。そのように、法に関することば（tśig）と文字（yi ge）は無量である。そのように、誤りのない智慧（*prajñā）と弁才（*pratibhā）は無量であるから、世尊ご自身が無礙解なのである、と語られるべきであるから、たった一語の中に、異門である多数の語をお説きになられたのである。名無礙解と語無礙解と字無礙解に対する碍無き智が、法無礙解の定義だからである。〕

- (39) 当該箇所以下の記述は『現觀莊嚴光明論』に引用されている。Cf. AAĀ WOGIHARA 202.24-203.8; VAIDYA 359.30-360.4:

uddeśavacanānām nirdeśāt prthag abhidheyārtho nāstīti kimartham uddeśavacanam iti cet. ucyate. samāsenā vistarārthādvadhāraṇārthaṃ sūtreṇa vṛttyarthādvadhāraṇavat. udghaṭitajñānām vineyānām anugrahārtham, anyeṣām āyatyām udghaṭitajñātāhetūpacayārtham, ātmanah samāsavayāsānirdeśavaśīṭasamdarśanārtham, anyeṣām tathābhyāsenā tadbijāvaropaṇārtham cety ācāryavasubandhuḥ. saṃkṣiptamātre samāhitam cittam yoginām tadvistarārthe sarvatra katham samāhitam syād ity etadārtham nirdeśadeśanā¹. tathā vistaramātre samāhitam cittam

yoginām tatsaṃkṣiptārthe sarvatra katham samāhitam syād ity etadartham uddeśadeśanety²
āgamaḥ. evaṃ sarvatra pratipattavyam.

¹nirdeśadeśanā VAIDYA: uddeśadeśanā WOGIHARA

²uddeśadeśanety VAIDYA: nirdeśadeśanety WOGIHARA

- (40) MSAT D bi 105b5; P bi 218b1: rnam graiṣ nams kyi dgoiṣ pa rgyas par ni rNam par
bśad pa'i rigs pa las blta bar bya'o // 「諸異門の広範な目的については『釈軌論』を参
照すべきである。」

- (41) AAĀ WOGIHARA 9.4-7; VAIDYA 272.29-273.2: saṃkhyāvacanaṃ tu śrāvaka-parivārāṇām
ānantyāt saṃkhyeyā-vadhārāṇārthaṃ, prabhūtārthasya¹ samāsasaṃkhyāgrahaṇāvismaraṇāt
sukhāvabodhārthaṃ, bahuśravaṇagrahaṇabhīrūṇām śrotrādvadhārthaṃ, atha vā
parimāṇajñāpanārthaṃ upāttam.

¹pūrvam prabhūtārthasya VAIDYA: prabhūtārthasya WOGIHARA

- (42) 『決定義経註釈』に二種の過失への言及がある（本庄 [1989 : 41]）。AVN
74.3-5: dvividhadoṣapratipakṣeṇa cedam uktam. dvividhau doṣau yathākramam apratipatti-
doṣaḥ smṛtibhramśadoṣaḥ ceti. 「二種の過失の対治としてこれ（標挙と詳説）が説か
れたのである。二種の過失とは、順に、理解しないという過失と、忘却という過失
とである。」

- (43) 室寺 [2006 : 157-9] ; 箕浦 [2007 : 21] 参照。ただしサンガバドらは、「上座」
のように標挙・詳説の有無を了義・不了義の判断基準とすることはしない。
- (44) 清浄分のうち、§50-§51 は同一出典の連続する経文を取り上げているため、『釈
軌論註』はまとめて註釈している。
- (45) ここで伝アサンガ作『仏随念註』『法随念註』『僧随念註』および伝ヴァスバンド
ウ作『仏随念広註』と、『釈軌論』第二章 (§1-§8) との関係について付言しておき
たい。まず、『仏随念註』以下の四文献が註釈対象としているのは、それぞれ以下
の「聖典」であり（全てチベット語訳でのみ現存確認）、その文句はそれぞれ以下
の『百経片』（SKhŚ）とほぼ逐語的に一致する。

- *Ārya-Buddhānusmṛti* (D no.279, P no.945): SKhŚ nos.2-5
- *Ārya-Dharmānusmṛti* (D no.280, P no.946): SKhŚ nos.6-8
- *Ārya-Saṃghānusmṛti* (D no.281, P no.947): SKhŚ no.9

さらに、上記「聖典」に対する伝アサンガ作『仏随念註』以下の四文献はそれぞれ
以下のとおりであり（全てチベット語訳でのみ現存確認）、その内容はそれぞれ第
二章の以下の§ とかなり類似する。

- *Buddhānusmṛtivr̥tti* (中御門 [2010]), *Buddhānusmṛtīṭikā* (中御門・藤仲 [2008]):
VyY chap.2, §1-§4
- *Dharmānusmṛtivr̥tti* (中御門 [2010]): VyY chap.2, §5-§7
- *Saṃghānusmṛtivr̥tti* (藤仲 [2010]): VyY chap.2, §8

類似の度合いとしては、第二章 (§1-§8) の文言はほとんど『仏随念註』以下四文
献に含まれており、四文献の方がより記述が詳細である。また四文献が註釈対象と
する「聖典」は、阿含經典の諸処に見られる三宝の称讃句を佛 (SKhŚ nos.2-5),

法 (nos.6-8), 僧 (no.9) に即して結合したものである。ただし伝アサンガ作『仏隨念註』以下の四文献と『釈軌論』とは内容が似通い過ぎているため、かなり奇妙である。四文献がアサンガ・ヴァスバンドウの真作でない可能性もあろう。

- (46) LEE [2001 : 155.5] は 'dod chags dan bral na rnam par grol bar 'gyur ro から分節しているが、堀内 [2009 : n.195] が指摘するように、§100 は 'phags pa ñan thos thos pa dan ldan pas (LEE [2001 : 155.1]) より始まる。
- (47) この一覧表には多数の誤植が含まれることをお詫びする。現時点までに確認しえた訂正箇所の一覧を上野 [2013 : 49] に掲載した。
- (48) この経文に関して、VyY, SKhŚ, VyYT の三者間に大きな異読はない。しかしチベット語訳文がなぜ韻文として出されているかは不明。後述する『長阿含』ギルギット写本、スコイエンコレクションおよびパーリニカーヤの平行箇所は全て散文である。
- (49) Cf. SKhŚ no.44, D śi 20b1-2; P si 22a6-8:
dad pa skyes nas¹ 'gro bar byed / soñ nas chos ñan par byed do //
des na chos de thos nas sems par byed do //
bsams nas 'jal bar byed ciñ / ñe bar rtog par byed la / bden pa de yañ lus kyiñ mñon sum
du byed ciñ śes rab² kyi so sor 'bigs par byed do źes bya ba dan /
¹na SKhŚ(DP). *Read nas.* ²rab SKhŚ (P) : par SKhŚ (D)
- (50) [] 内の補足はグナマティによる補足的引用に基づく。

VyYT D si 185a2-3; P i 54a4-5:

dad pa¹ skyes nas 'gro bar byed //
soñ nas chos ñan par byed do //
des chos de thos nas sems par byed do //
bsams nas 'jal bar byed do //
bca² nas ñe bar rtog par byed la / bden pa de yañ lus kyiñ³ mñon sum du byed ciñ
/ śes rab kyiñ⁴ so sor 'bigs par byed do
źes bya ba ni mdo sde'i dum bu yin no //
¹dad pa VyYT (P) VyY (DPL) : dan ba VyYT (P)
²bca VyYT (D) : gźal VyYT (P)
³kyiñ VyYT (D) : kyi VyYT (P)
⁴kyiñ VyYT (D) : kyi VyYT (P)

「『信が生じて、〔尊者に〕近づく。近づいて、①法を聴く。かの者は、その法を聴いて、②思惟する。思惟して、③考量する。考量して、④考察する。⑤そして、その真実に付き従うことによって現前にして、⑥智慧によって通達する。』

というのが経片である。」

- (51) 少なくともチベット語訳『釈軌論』においては、加行道より以前／以後の修習者による法の聴聞はそれぞれ ñan pa / thos pa と訳し分けられている。拙訳ではそれぞれ聴／聞と訳し分ける。

- (52) 『釈軌論註』によれば、理 (*yukti) とは三つのプラマーナを指す。『俱舍論』「賢聖品」における「思所成慧」の説明には「理に基づいて考察することによって生じた〔決択〕が思所成〔慧〕である」(AKBh 335.5 : yuktinidhyānaś cintāmayī) との「他の人々」(『順正理論』は經主と呼ぶ)の見解が記されている。KRITZER [2005 : 346] と併せて参照。
- (53) 善説と悪説とを区別するの意。
- (54) 新出『長阿含』梵文写本の一覧表については HARTMANN [2004 : 27] 参照。当該經典は no.19, *Kāmaṭhika* に相当する (317v5-329r4)。さらに SHT IV 165 (Fragm. 29-31), 177n5; III 883a; V 1025R4-7 にも、同經の中央アジア出土梵文断片が存在する (Cf. WILLE [2013])。なお、対応漢訳、チベット語訳は見当たらないようである。
- 当該經典の主要人物は Caṅgī/Caṅki ではなく、むしろ Bhāradvāja 尊者と呼ばれる *Kāmaṭhika/Kāpaṭhika/Kāpaṭika* である。世尊とこの若きバラモンとの問答形式で議論は進められてゆく。そのため有部阿含では当該人物の名称がそのまま經題とされたものと推測される。
- (55) 所属部派は不明であるが、当該經典に対応する *Caṅgīsūtra* (校訂者による呼称) の断片が、Schøyen Collection の中に存在する。既に翻刻研究が完了されており、BREKKE [2000] は 9 片を担当し (ただし HARTMANN [2002 : 1] によればそのうちの三片は当該經典の断片かどうかは不明)、HARTMANN [2002] は 15 片を担当した。HARTMANN [2002 : 1] によれば、写本は 4 世紀頃のもので、北東型グプタ文字で記されている。BREKKE [2000 : 54-55] は、言語がプラークリット化している点、あるいは Mahāvastu や大衆部の比丘尼律などと一致する表現が確認される点から、当該經典を大衆部説出世部 (Mahāsāṃghika-Lokottaravādin) 所属とみなす。ただしこの点については HARTMANN [2002 : 1] が疑義を呈し、他部派の可能性もあるとする。
- (56) HARTMANN [2002 : 15.28-30] からの転写。筆者は DĀ ms を未参照である。
- (57) HARTMANN [2002 : 15.16-20] からの転写。当該表現は二箇所にわたって確認される (ibid., p.16.3f.)。なお筆者は当該写本を未参照である。
- (58) 片山 [2000 : 423f.] に翻訳研究がある。
- (59) 当該箇所をめぐる、『釈軌論』所引經とギルギット出土『長阿含』写本との相違は、śrutam dharman dhārayati dhṛtam dharmaṃ cintayati のうち太字箇所が『釈軌論』所引經にない点である。
- (60) ただし『俱舍論』『釈軌論』の著者としてのヴァスバンドゥと、「撰異門分」編者とが依用した阿含經典は異なっている。えてして「撰異門分」編者が依用した阿含經典は、ヴァスバンドゥのそれよりも語句が多い点に特徴がある。
- (61) T30, 766c17f. から一致する。
- (62) T30, 770b9f. から一致する。
- (63) 上野 [2012a : 11-19] において取り上げ、チベット語訳テキスト、和訳および『雜阿含經』第 270 經との対照を示した。パーリ平行經は SN 22.102 = SN III 155-156, aniccasaññā. 当該經典はチベット語訳大乘『涅槃經』第四章に *glan po che'i rjes lta bu'i mdo* (『大象の足跡の如きという經』) との名称で引用されている。

- (64) T30, 767a1f. から一致する。
- (65) T30, 762b8-10 「於食知量」から一致する。ただし当該箇所に関して「撰異門分」では経句が引用されるも註釈はされておらず、詳細は『声聞地』（第一瑜伽処, ŚrBh I 18.8-13）に委ねられている。
- (66) LEE Ed. は当該箇所を mdo sde'i dum bu kha cig gi tśig ni don bsad pa'i phyir と読む（北京版のまま）。このとおりに読めば「幾許かの経片の語は意味が解説されているから」となろうか。しかしそう読んだとしても、その趣意は不明である。
- (67) 全十五組の前主張と後主張から構成される第五相「論難・答釈」（*codyaparihāra*）のうち、(10) が現量、(11) から (13) が比量、(14) と (15) が教量に関連した議論である。
- (68) 「そ〔の経文〕」とは以下を指す。VyY D śi 71b6; P si 84b5-6: 'di la 'phags pa ñan thos thos pa dañ ldan pa ni bdag ni skye dgu ser sna'i dri mas kun nas dkris pa rnam las sems dri ma'i ser sna dañ bral bas lhug par gtoñ¹ ba dañ lag² brkyañ ba dañ zes bya ba ni mdo sde'i dum bu'o //
- ¹gtoñ VyY (DL) : btoñ VyY (P) ²lag VyY (PL) : lag pa VyY (D)
- 「現世において、聞をそなえた聖者である声聞が、『わたしは、慳の垢にまわりつかれている人々よりも、心が垢である慳を離れているから、①ひまなく捨すること、②手をさしのべること、』というのが経片である。」
- 『雜阿含經』第 927 經に平行箇所がある（CHUNG [2008 : 192-193]）。T2, 236c2-4: 爲慳垢所纏者。心離慳垢住於非家。修解脱施勤施常施。樂捨財物平等布施。
- 『集異門足論』における引用例がより『釈軌論』所引経文に近い。T26, 436b7-10 : 有聖弟子。於爲慳垢所纏衆中能離慳垢。雖住居家而心無著。能行惠捨能舒手施。常樂棄捨好設祠祀。惠捨具足。於行施時平等分布。是名捨財。
- ①以下の定義用語は Mvy (IF) nos.2848-52 にも収録されている。
- Mvy (IF) 2848: lhug par gtoñ ba = muktatyāgaḥ.
- Mvy (IF) 2849: lag brkyañ ba = pratatapāṇiḥ.
- Mvy (IF) 2850: rnam par gtoñ ba la dga' ba = vyavasargarataḥ.
- Mvy (IF) 2851: mchod sbyin 'khor mor/lor byed pa'am sbyin pa mi chad par byed pa = yāyājukāḥ.
- Mvy (IF) 2852: sbyin pa la 'gyed/'ged par dga' ba = dānaśaṃvibhāgarataḥ.
- (69) 山口 [1959 : 181-182] ; 小谷 [2000 : 41-42] ; SKILLING [2000 : 321] ; VERHAGEN [2005 : 585-586] など。
- (70) PSĀVN 117.18-19: yad atra tatra yathābhūtasyañānam adarśanam anabhisamayāḥ tamas saṃmoho 'vidyāndhakāram iyaṃ ucyate avidyā; NidSa 16.4: yatra tatrāññānam adarśanam anabhi(sa)mayaṣ tamah saṃmoho 'vidyānu(sayaḥ /) ayam ucyate avidyā; PSĀVN(Tib.) 147.7-10: gañ de dañ der yañ dag pa ji lta ba bzin du mi šes pa dañ / ma mthoñ ba dañ / mñon par ma rtogs pa dañ / rmoñs pa dañ kun tu rmoñs pa dañ / ma rig pa dañ / mun pa'i rnam pa zes bya ba 'di ni ma rig pa zes bya'o //
- (71) PSĀVN 117.24-27: vijñānapratyayaṃ nāmarūpam iti nāma katamat. catvāro 'rūpiṇaḥ

skandhāḥ. katame catvāraḥ. vedanāskandhaḥ saṃjñāskandhaḥ saṃskāraskandhaḥ vijñānaskandhaḥ / rūpaṃ katamat. yat kimcid rūpaṃ, sarvaṃ tat catvāri mahābhūtāni. catvāri ca mahābhūtāny upādāya itīdaṃ ca *rūpaṃ*; NidSa 16.7: vijñānapratyayaṃ nāmarūpaṃ iti nāma katarat. catvāro 'rūpiṇaḥ skandhāḥ. vedanāskandhaḥ saṃjñāskandhaḥ saṃskāraskandhaḥ vijñānaskandhaḥ. rūpaskandhaḥ katarat. yat kiñcid rūpaṃ sarvaṃ tac catvāri mahābhūtāni. catvāri ca mahābhūtāny upādāya itīdaṃ ca rūpaṃ; PSĀVN(Tib.) 147.18-23: rnam par śes pa'i rkyen gyis miñ dañ gzugs źes bya ba la miñ gañ źe na / gzugs can ma yin pa'i phuñ po bži ste / tśor ba'i phuñ po dañ / 'du śes kyi phuñ po dañ / 'du byed kyi phuñ po dañ / rnam par śes pa'i phuñ po'o //

gzugs gañ źe na / gzugs gañ yin pa ci yañ ruñ / de dag thams cad 'byuñ ba chen po bži dañ / 'byuñ ba chen po bži dag rgyur byas pa ste /

- (72) rūpa の語源解釈を説く『所食〔経〕』は『雜阿含經』第 46 経などに平行するが、第 46 経の撰頌 (uddāna) は「三世陰所食」(T2, 12a8; 大正新脩大藏經における原文は「三世陰世食」であるが、印順 [1983 : 159, n.5] の指摘に基づき「世食」を「所食」に訂正する) である。CHUNG [2008 : 63] も同様に訂正している。

- (73) 『俱舍論』『界品』にも引用されている (HONJŌ no.1014)。本庄 [1984 : 5] によれば、平行資料は『雜阿含經』第 46 経 (T2, 11b21f., 梵文断片については CHUNG [2008 : 63-64] 参照) である。AKBh 9.10-12: uktaṃ bhagavatā rūpyate rūpyata iti bhikṣavas tasmād rūpopādānaskandha ity ucyate. kena rūpyate. pañisparśenāpi spr̥ṣto rūpyata iti vistarāḥ.; AKVy 34.13-14: bādhanaṛthaparicchinneṇa rūpyate-śabdena rūpyate rūpyata iti bhikṣava ity atra sūtre rūpyate-śabdo bādhanaṛtha eva paricchidyate.

- (74) 『緣起經釈』『名色支』においても同一の註釈がなされている。PSVy D 24b7-25a1; P chi 27b4-6: mig gi yul ni gzugs źes bya ba 'jig rten na grags na / 'dir 'byuñ ba dañ 'byuñ ba las gyur pa thams cad la ci'i phyir gzugs źes bya źe na / gnod par gyur pa yin te / de bas na gzugs źes mdo sde gzan las bstan te / gzugs źes bya ba ni gnod par gyur pa źes bya'o // 「眼〔根〕」の対境が rūpa と呼ばれることは世間でよく知られているのに、ここでは〔四大〕種と〔四大〕種所造を、なにゆえ rūpa と呼ぶのか。傷めつけられる、それゆえ rūpa であると他の経に示されている。rūpa と呼ばれるものは、傷めつけられるものと呼ばれる。」

- (75) PSĀVN 117.20-21: avidyāpratyaḥ saṃskārā *iti saṃskārāḥ* katame. trayaḥ saṃskārāḥ kāyasamkāro vāksamkāro manāḥsamkāraḥ iti. (チベット語訳に基づいて**内の梵文を還元した。); NidSa 16.5: avidyāpratyaḥ saṃskārā iti saṃskārāḥ katame. trayaḥ saṃskārāḥ. kāyasamkāro vāksamkāro manāḥsamkāraḥ.; NidSa 16.6: saṃskārāpratya(yaṃ) vijñānam (iti vijñāna(m)) katarat. ṣaḍ vijñānakāyaḥ.; PSĀVN (Tib.) 147.11-15: ma rig pa'i rkyen gyis 'du byed ces bya ba'i 'du byed gañ źe na / 'du byed ni rnam pa gsum ste / gsum gañ źe na / lus kyi 'du byed dañ / nag gi 'du byed dañ / yid kyi 'du do //

'du byed kyi rkyen gyis rnam par śes pa źes bya ba'i rnam par śes pa gañ źe na / rnam par śes pa'i tśogs drug ste /

- (76) 『顕揚聖教論』と『瑜伽師地論』『摂積分』との重複関係については向井 [1979: 58, n.58] 参照。
- (77) 「摂事分」(no.1579) T30, 878c10-13: 謂略由四相廣辯彼事。何等爲四。一異門差別故、二體相差別故、三釋詞差別故、四品類差別故。異門體相釋詞差別、如攝釋分應知其相。
- (78) 例えば小谷 [2000: 40-1, n.25] が指摘するように、『プトゥン仏教史』では「法」を記述するに際して「語義」(4) が用いられている。なおプトゥンが法の「分類」(*dbye ba*) として挙げる '*bras bu'i chos* (果報としての法 *phaladharma*), *sgrub pa'i chos* (実践〔徳目〕としての法 *pratipattidharma*), *bśad pa'i chos* (教説としての法 *deśanādharmā*) の三類型 (小谷 [2000: 46f.]) は、『縁起経釈』に基づくものである (上野 [2012a: 26, n.6])。つまりプトゥンは「法」の解説に際して、徹頭徹尾、ヴァスバンドウの著作に依拠しているのである。

拙稿「ヴァスバンドウの經典解釈法 (2) —要義 (*piṇḍārtha*) —」
『佛教學セミナー』第 96 号の訂正表

頁数	行数	誤	正
(37) 本文	6	P i 9a7-b7	P i 9a7-b4
(48) 本文	7	D śi 26b6	D śi 26b6-7
(48) 本文	8	P si 29a7	P si 29a7-8
(49) 本文	2	AKVy 442.20-26	AKVy 522.20-26
(49) 脚注	5	AKVy 442.20-26	AKVy 522.20-26
(49) 脚注	7	『雑阿含経』第 490 経	『雑阿含経』第 39 経
(49) 脚注	14	AKBh 366.20f.	AKBh 376.20f.

拙稿「『釈軌論』における阿含經典の語義解釈法 (3)」『佛教學セミナー』第 97 号
における欠落の補遺 (39) 頁 13 行目)

2.3.2.0 D śi 38b3-39a2; P si 43b2-44a3; LEE 28.8-29.8

ji skad du phuṇ po lña mams daṅ / naṅ gi skye mched drug rnamś zes bya ba de lta bu la
sogs pa graṅs gsuṅs pa lta bu dag kyaṅ de dag gi brjod par bya ba'i don mi go ba ni ma yin
na /* ci'i phyir graṅs gsuṅs pa'i dgos pa'i don yaṅ brjod dgos so //

*na / VyY (D) : no // VyY (PL)